

ヨハネによる福音書 連続講解説教

始・二〇〇九年一月四日

至・二〇一二年九月一六日

辻 幸宏

本説教集は、二〇〇九年～一二年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思ひ、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ヨハネによる福音書は、四福音書の最後に位置し、他の三福音書（共観福音書）とは趣が異なります。一方、ヨハネの手紙（一～三）、ヨハネの黙示録と同一の著者であると考えられており、それらを参照して頂ければと願います。個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊	公同書簡一	ヤコブの手紙
	公同書簡二	ペトロの手紙一
	公同書簡三	ペトロの手紙二
	公同書簡四	ヨハネの手紙・ユダの手紙
	ヨハネの黙示録	
	ヨハネによる福音書一・二・三	

I 主イエスの愛

主イエスは十字架において死を遂げられますが、世にいる弟子たちを最後までこの上なく愛し抜かれました。普通の人間であれば、支持して一緒に歩み続けている間は友として交わりを持つことができず、批判したり、言い逆らったり、離れていくと、その愛もなくなり、逆に憤りがこみ上げてくるものではないでしょうか。しかし神の愛・キリストの愛は、変わりません。イスカリオテのユダがイエスを裏切ります。シモン・ペトロは離反します。主イエスが逮捕された時、すべての弟子たちが主イエスから離れていきます。また主イエスが死から復活された時、トマスは「復活の主イエスに出会い、この指を釘跡に入れなければ信じない」と語ります。主イエスはこれらのことをすべて知っておられながらも、弟子たちを愛し抜かれました。イスカリオテのユダに関しても、主イエスは最後まで彼が悔い改め、神に立ち帰られることを願っておられました。

主イエスの愛、それは直接的には十字架の死と復活・昇天に至るまでの地上での歩みの中のことですが、今、天におられるキリストの愛は永遠に貫かれています。つまり直接的には最後の晩餐に与っている弟子たちに語られている言葉ですが、同時に私たちに対して語りかけてくださる言葉です。どのようにして主イエスは私たちを愛して下さっているのでしょうか？ 主イエスは、神の民とされている私たちのために、日々執り成しの祈りをささげてくださっています（参照・ウエストミンスター大教理問五四、ローマ八章三一b節、三四〜三五節）。私たちは神から離れ、神の御前に罪を犯します。神によって与えられた恵みに対する感謝を忘れ、不平・不満ばかり口に出します。しかしキリストは、私たちが主イエスを知る前から、私たちのことを覚えて、罪の悔い改めと信仰が与えられるよう、執り成し続けてくださっています。

II 主イエスの愛の表れ

主イエスの愛は具体的に、①最後の晩餐、②弟子たちの足を洗うこと、③十字架によって示されます。当時、罪人や奴隷とは一緒に食卓の交わりを持つことなどあり得ませんでした。ですからファリサイ人たちは、罪人と一緒に食事をする主イエスを批判し、主イエスも罪人として数えます。しかし主イエスは、奴隷も罪人も一緒に食卓を共にすることをお許し下さり、主イエスと共に晩餐に与ることにより、神の国につながる神の子であることを宣言してくださいます。これはまさに罪人の罪を赦す愛を持っているお方だからこそ可能となる恵みです。

また主イエスは弟子たちの足を洗われました。足を洗うことは奴隷の仕事です。弟子たちはこの時、誰が一番偉いかと議論していました（ルカ二二章二四〜三〇節）。主イエスはキリストには愛の業が求められており、謙遜と遜りが必要であることをお示し下さっています。つまり神によって救いに導かれた者は、神を愛し神を礼拝しますが、同時に隣人を愛し、隣人に仕える者となるのです（参照・一三章三四〜三五節）。

三つ目が十字架です。十字架は愛の極みです。人間イエスとしては、死の苦しみを耐えがたい思いとして、父なる神に訴えておられました（一二章二七節）。しかしキリストは十字架の道を歩み、私たちの救いのために命をささげてくださいました。これこそがキリストの愛の業の極みです。友のために自分の命を捨てること以上の愛はありません（一五章一三節）。

III 足を洗うイエス

最後に洗足について確認します。神の愛が示されたキリスト者は、互いに愛し合う者とされます。主イエスはその愛の業の具体的な表れとして、弟子たちの足を洗われました。

この時、足を洗うことの特別な意味があるのかどうかを考えることが求められます。私たちは、信仰を告白する時に、水による洗いと洗礼を授かりますが、ここでの主イエスの行為は、洗礼の意味で受け取ることはできません。洗礼は一度限りであり、主イエスもペトロに対して、「既に体を洗った者は、全身清いのみだから、足だけ洗えばよい」（一

○節）とお語りくださいます。ですから、洗礼を繰り返して行われたと解釈してはなりません。

しかしキリスト者は信仰を告白し、罪の悔い改めを行い、洗礼を授かったからといって、罪を犯さなくなつたのではありません。罪赦された罪人であり、日々、主の御前に罪を犯し続けます。そのため私たちは日々、罪を悔い改めることが求められます。そのため「毎日のように足を洗わなければならぬ」。だから主は、罪を清める儀式を繰り返し行うことを求め、特に主の晩餐の時に求められる」と解釈する人たちもいます。しかし、主の晩餐が制定されている他の共観福音書で、主イエスは足を洗うことを求められません。また新約聖書を通じて、初代教会が、主の晩餐に伴って、足の清めの儀式を繰り返したことは記されていません。

従って私たちはこの行為を象徴的な行為として解釈し、主の晩餐に与る時に、常に洗礼のことを覚えつつ、罪の悔い改めと信仰の告白を確認すれば良いのです。だからこそ聖餐式では式辞において次のように語ります。「聖餐を受ける者は、神の御前に、自分自身を吟味し、悔い改めと信仰を表さなければなりません」。

主はキリストにより私たちを愛し、私たちを神の国の交わりに入ることとを良しとしてくださいました。そしてキリストは私たちに対する愛をまっとうされるために十字架にお架かりくださいました。神の愛が示され、救いの中にある私たちは、キリストの愛を実践することが求められています。この一週間の自らの姿を顧み、罪を悔い改め、信仰を告白して、主の晩餐に与り、主による救いに喜びをもって、主に仕え、人々に仕えるものとなることが求められています。

「キリストを裏切る者」

ヨハネによる福音書一三章一〜二〇節

序

二〇一一年四月一〇日

神による救いの計画を語ろうとする時、罪人の滅びが問題となります。また同様にイスカリオテのユダのことも問題となります。感情的に考えると、真理から離れてしまいます。私たちは主がお語りになつた御言葉に、真摯に耳を傾けなければなりません。

I 主イエスによる弟子としての選びと、サタンへの介入

ヨハネによる福音書は、イスカリオテのユダの裏切りに関して、一つのテキストとして語ることはせず、散りばめています。それは神による救いという福音の本質的なことではないが、決して忘れてはいけません。そして語っているようです。

イスカリオテのユダに関するヨハネによる福音書の記述は次のとおりです。「『その中の一人は悪魔だ。』イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた」（六章七〇〜七一節）。「弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った」（一二章四節）。「夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた」（一三章二節）。聖書はユダの裏切りを予告し、それは悪魔の業であることを語ります。ユダが主イエスを売る事件はユダ個人の問題として突発的に起こつたのではなく、サタンが介入しています。旧約の時代にサタンによってヨブに試練がもたらされる時、主の許しの下で行われたように、ユダの業も主御自身がご存じであり、主が許され、主の御計画の内に行われました。

II 神の選び

サタンによってユダが裏切り主イエスから離れていくことは、キリストにつながる神の民が主によって集められることにより、はっきりします。つまり主は、神の民として神の国の祝福に満たしてください。さるキリスト者を、主の御前にお集めくださり、主を信じ、信仰を告白し、洗礼による水の清めをお与えくださいます。そして主イエスは「既に体を洗っ

た者は、全身清い」とお語りくださり（一〇節）、ペトロもイスカリオテのユダを除く弟子たちも、主イエスは神の民として、すでに救われ、清い者とされていることを宣言してください。そうした中、主イエスは、サタンが介入することによってイスカリオテのユダが裏切ることを知っておられ、主イエスはユダに神の民には含まれていないことを宣言されます（一一節）。

では洗礼を受けても、神の民でない者がいるのか？ 残念ながらいると言わなければなりません。主イエスも毒麦のたとえ（マタイ一三章二四〜三〇節）をお語りになります。良い麦の中に毒麦が混じって育ちます。この事に対して主イエスは、収穫（御子の再臨と最後の審判）の時まで、そのまましておくようにお語りになります。しかし私たちは、自分自身のこと、周囲にいる人たちがそういう人なのかと思う必要はありません。主は信じる者を救いに導いてくださるのであり、神の恵みに入れられている私たちは、救いから離れていくことなど恐れることはありません。主を信じ続けている時、主は私たちを救いの恵みにあることを語り続けてくださいます。だからこそ私たちは、主イエスが「既に体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい」との救いの宣言に耳を傾ければよいのです。

III 選びと全知全能なる神

私たちを救いへと選んだのは主イエスであって、他の誰でもありません（一八節）。私たちの救いは、神の主権によりキリストによって行われました（参照・六章三七節）。父なる神が選んで御子に授けたもうた者たちは、「一人も失わないで終わりの日に甦らせる」と約束してくださっています。神の選びは救いに至る選びです。

つまり人の目には隠されているけれども（奥義）、誰が神の民として救われ、誰がそうではないのかを、主イエスはすべて知っておられます。私たちにとっては、突然の出来事であっても、主はすべて知っておられ、神のご計画の内にあります。そして主イエスは、一人ひとりがどういいう道を行くかもすべて知っておられる全知全能なる神です。

IV 私たちに与えられた約束に注目せよ！

私たちは人間的な興味として、ユダがなぜ弟子として選ばれ、しかし結果としては主イエスを裏切り滅びていくのかに関心が行きます。しかし重要なことは、この事実を主が旧約の時代からご存じであり預言して来られたことです。そして主の約束が、今、主の御前に集められて私たちに對しても語られています（一九節）。「わたしはある」主は永遠から永遠に存在されるお方であり、いつも私たちと一緒にいてくださいます。預言されていたことが、実現していきます。イエス・キリストを救い主と信じる者には、罪の赦しと永遠の生命が約束されています。他の誰でもない、今、ここに主の御前に立っているあなたに示された救いの宣言です。

「主イエスの模範」

ヨハネによる福音書一三章一二〜二〇節

二〇一一年五月一日

I 新約の教会と洗足

今お読みしました御言葉は、一三章一節から始まります主イエスが弟子たちの足を洗われた洗足の出来事の続きです。主イエスは「わたしがあなただにしておりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」（一五節）と語られていることから、教会では洗足木曜日（洗足式）として足を洗うことを行ってきました。現在でもローマ・カトリック教会や一部のプロテスタント教会で洗足式を行っていています。

しかし私たちの教会では洗足式は行いません。このことは新約聖書の理解によります。新約聖書で他に洗足に関して記されている箇所は一箇所だけです（Iテモテ五章一〇節）。ここで洗足を行うのはやもめの働きだと語られています。やもめは教会のひとつの役職であり、使徒言行録六章では、やもめは教会から日々の給食を受けている困窮者として語ら

れています。しかし彼女たちは次第に教会内部で重んじられ、務めにつくようになり、女性執事と同じような務めであったと考えられています。なぜ足を洗うことが、やもめの仕事になったのかについてはよく分かりません。足を洗うことは、世間では奴隷が行うことで最も疎まれていましたが、教会においては尊ばれる奉仕でした。そして次第に、やもめに託される貴い仕事となっていました。すなわち、主のなしたもうた手本を引き継ぐのが彼女たちの勤めとなったのです。すなわち足を洗うことは、主イエスに教えられ、教会が守らなければならぬ礼典のように重視されることはなく、ディアコニア、つまり教会の愛の業の一つとして受け継がれてきました。そのため、生活文化がまったく変化した現在では、愛の業として足を洗うことは、必要なくなり、現実的なディアコニアとしての働きが重視されていると言ってよいかと思えます。

II 主イエスの愛の業

次に主イエスが語られた言葉に聞きます。主イエスは「わたしがあなたがたにしたことが分かるか」（一三節）とお語りになります。私たちは主イエスが行われたことを本当に理解しているのか、立ち止まって考えなければなりません。主イエスの御業を私たちが理解しようとする時、私たちは主イエスによって招かれている救いを理解し、受け入れることが求められているのであり、信仰に関わる問題と受け取らなければなりません。

その上で主イエスは一三〜一四節をお語りになります。ここで求められているのは、「仕える」・「謙遜になる」ことです。先生であり、主であるイエスが、弟子たちに仕えられ、本来奴隷が行うことを行われました。遜りです。主イエスの遜りは、御子である方が授けられたこと、奴隷の働きを行われたこと、そして私たちが救うために十字架の死まで担ってくださったことにあります（参照・フィリピ二章六〜八節）。

ですから主イエスが行われた御業は、神の愛に基づきます。私たちは、日々の生活で主の御前に罪を犯しています。しかし主イエスは私たちが救うために十字架にお架かりくださり、私たちの罪を贖ってくださいました。私たちは聖餐式で、十字架の贖いによる救

いを確認します。だからこそ私たちは主の御前に遜り、罪を悔い改めることが求められます。だからこそ私たちはここで、十字架の愛に注目しなければなりません。足を洗う行為や謙遜に仕えるといった業に注目してはなりません。

III 徳（道徳）に留めるな！

日本におけるキリスト教会の宣教の歴史を考える時、道徳的なこと、つまり徳を立てることに、人々に受け入れられていた要素があるかと思えます。そのため、日曜学校が盛んであった時代は、親が道徳教育を受けさせる一環で教会に連れて行き、その道徳性を教えて頂いていたと言っても過言ではありません。今日の御言葉を解釈するにあたって、上の立場にある人や、有能な人が謙遜を実行すると、その人の名声はさらに高まり、信用は増し加わり、この世で成功者となるのだ。謙遜は日常生活における徳の延長である。その延長を修練を積んで達成し、誉れを高めようと努めることは良いことだ、このように教えられることもあったのではないのでしょうか。

教会に、徳・清さというイメージが伴うことは、一概に間違いであるとは言いきれませんが、信仰の本質であってはなりません。道徳的なことが中心となりますと、①律法主義化、②信仰の個人化が生じてきます。つまり愛のない行いが求められ、行えない人に対する裁きが行われ、また謙遜・徳・修練と語ると、自分自身のために行うこととして捉えられ、信仰が個人化してしまいます。

私たちは、キリストの愛に倣うべきです。キリストの模範は、謙遜によって教えられ、神の人に対する愛が洗足そして十字架として表されています。私たちは、神に愛されて罪赦され、神の子とされています。そして神に愛されている者として、神を愛し、神を礼拝する民とされています。そして主は、神を愛するように、隣人を愛することを求めておられます。それが現在に生きるキリスト教会としては、愛の業・ディアコニアとして執事的な働きとなります。愛の業は執事の役職にある人たちだけが行うのではなく、主によって救われ、神によって愛されている私たち一人ひとりが、主に仕え、人々に仕えることが求

められています。主イエスは、その模範を示してくださいました。

「心を騒がせる」 ヨハネによる福音書一三章一二〜二〇節

二〇一一年五月八日

序心を騒がせている私たち

説教題を「心を騒がせる」といたしました。三月一日の大地震以降、日本中の人々が心を騒がせているのではないでしょうか。被災者・被害に対する心の痛み、放射能による目に見えない恐怖、さらにはそこから来る自分自身の無力さ……。こうした思いを、日本中の人々、いや世界中の人々が持っているかと思えます。

I 心騒ぐ主イエス

今日与えられた御言葉では、主イエスお一人が心を騒がせておられます。この所は、別の日本語訳聖書では、「霊の激動を感じ」（新改訳）、「霊がかき乱されて」（岩波訳）、「心に激しい動揺をおぼえて」（柳生訳）、「心が張り裂ける思いで」（フランシスコ会訳）と訳しています。これらの訳をとおして、主イエスの心を理解することができるとかと思えます。主イエスは、この日の夜のうちに逮捕され、十字架に架けられることを知っておられます。そうした中で持っておられる心の騒ぎ、霊の激動です。

先生であり、主である方がただならぬ思いを持っておられます。弟子たちは、意識して主イエスを見ておれば、この感情の変化を理解することができたのではないかと思えます。しかし「弟子たちは、だれについて言っておられるのか察しかねて、顔を見合わせ」ていました（二二節）。このギャップを、私たちは心に留めなければなりません。

主イエスは、何についてそれ程、心を騒がせておられたのでしょうか。御自身が十字架に架けられ苦しむこと、死を遂げなければならぬことでしょうか（参照・一二章二七

節）。ここでの主イエスの憤りは、弟子の一人が主イエス御自身を裏切ることに對してです（一三章二一節）。

II 犯人捜しを行う弟子たち

主イエスの隣には、弟子たちの一人でイエスの愛しておられた者が食事の席に着いていました（二三節）。この弟子については、ヨハネによる福音書では一九章二六節、二〇章二節、二一章七節、二〇節にも登場します。ヨハネによる福音書は彼について名前を記しません。福音書記者であるヨハネ自身のことであるとの理解が一般的です。ヨハネは兄弟ヤコブと、ペトロとその兄弟アンデレと共に主イエスの弟子となり、ペトロとも親しい間柄でした。

弟子たちは主イエスの憤りの意味を理解することなく、言葉じりから主イエスの語られた裏切り者としての犯人捜しを始めます。最初にペトロが犯人捜しを始めた時、主イエスの愛する弟子であるヨハネは、ペトロからの合図を受けて、主イエスに對して「主よ、それはだれのことですか」と尋ねます。弟子たちが犯人捜しを始めたのは、誰かを突き詰めることにより、イエスが逮捕されることを阻止しようとする意志があったからです。弟子たちは、主イエスが逮捕されようとする時、剣において大祭司の手下に打ちかかり、その右の耳を切り落としたのであり（ルカ二二章四九〜五〇節）、この時も弟子たちは犯人捜しを始め、主イエスを守ろうとしました。

このように弟子たちは殺気立っている中、心が騒いでいた主イエスは、逆に冷静に弟子たちに答えられます。「わたしがパン切れを浸して与えるのがその人だ」。主イエスは弟子の問いかけに對して答えられました。しかし、殺気立った弟子たちにはユダが行動を起こしても、主イエスの語られた者であることを受け入れることはできませんでした。目で見て、耳で聞いたとしても、そこに聖霊が働かなければ、主の真理を知ることとはできず、閉ざされたままです。

III 滅び行く者に心騒がせる主イエス

主イエスは、「パン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダにお与えになった。ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った」(二六〜二七節)。「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった」(三〇節)。過越の食事を取っていたのであり、夜であることは、改めて記す必要はありません。しかしヨハネによる福音書は「夜であった」と記します。主イエスは光として生まれくださいました。命は人間を照らす光であった(一章四節)。それとは対照的に、ユダは光の前に立ちながら、サタンに渡され、夜の暗闇に消えて行きました。

つまり、主イエスが弟子たちの問いかけの答えとしてパン切れを浸してユダに与えることは、同時にユダが裏切り、サタンに仕える者として行動を開始するスイッチが入った時でもありました。主イエス御自身は、このことを知っておられました。弟子の中の一人であるユダがサタンに売られ、罪を犯します。だからこそ、主イエスは心を騒がせ、霊が掻き立てられる思いにあり、これが主イエスの愛です。

そして主イエスの愛は、現在に生きる私たちにも示されています。この大震災において一番心を騒がせておられるのは、主イエス御自身です。主の御前に集められていない多くの魂が失われていきました。だからこそ私たちは今、主による救いに入れられることのない人々がおおり、このことが主イエスの心の痛みがあることを覚えなければなりません。

「互いに愛し合う」

ヨハネによる福音書一三章三一〜三五節

二〇一一年五月一日

序 出て行くイスカリオテのユダ

過越の食事の最中、主イエスはイスカリオテのユダが裏切り、御自身が逮捕されることを、弟子たちに語られました。ユダにとっては、秘密裏に計画し、最後の段階に来ていま

した。ですから主イエスがこの計画を知っていることにより、ユダはこの計画が失敗するのではないかとの恐れと焦りを抱きます。そのため彼は、晩餐の途中でありましたが、席を立て、ユダヤ人の所に向かいます。

I 栄光をお受けになる主イエス

部屋には、主イエスとユダを除く一人の弟子たちが残されています。人間的な思いに立つと、逮捕から逃れるために作戦会議を行います。しかし主イエスは、神の子である弟子たちに対して、神の国についての説教と祈りを行います(一七章)。つまりここでの主イエスには、逮捕され十字架に架けられようとする敗北者の姿は微塵も感じられず、むしろ、勝利者として振る舞われます。このことは主イエスの第一声に表れています(三一節)。

主イエスの逮捕・裁判・十字架・死・陰府下りについて、通常「受難」と語ります。復活を遂げて、初めて死に打ち勝ち、勝利を遂げられたと解釈します。そして主イエスの栄光化は、天に昇られることによって完成します。しかしこの時、主イエスはすでに栄光をお受けになられていました。

このことを私たちはどのように解釈すれば良いのでしょうか？ ユダにサタンが入り、ユダは動き出します。このことにより、主イエスの逮捕と十字架の死は確定しました。人間的に見れば主イエスは敗北者です。しかしここに主の勝利があります。キリストの十字架によって、私たちの罪は贖われ、自分自身の十字架を背負って滅びることはなくなりました。私たちに勝利をもたらされるのが確定した時、主イエスは栄光をお受けになられたのです。これはアダムとエバの最初の罪から始まった主なる神とサタンの長い戦争に対する勝利宣言です。父なる神の栄光が、御子である主イエス・キリストに与えられました。まさに光としてこの世に来られた御子により、主なる神御自身に光があることが示されました。

II 天に昇られるキリスト

しかし主イエスは、弟子たちの前から姿を消されます(二三節)。これは十字架に死に、墓に眠られたことを語っているのではありません。復活の後、四〇日、弟子たちと共に過ごされ、主イエスは天に昇って行かれることを語っています。

主イエスが栄光を受けられることと、主イエスの昇天は関係していません。主イエスは、神の御子でありながらも、人として遜られ、律法に仕えられました。御子が人となられた目的は、罪人であり滅び行く私たちの罪を贖い・救うためでした。つまり、御子が十字架の死と復活を成し遂げられた時、御子のこの世における働きは終わりを遂げます。働きを終えれば、本来あるべき所、つまり神の国に帰られます。それだけではなく、御子は天において私たちが神の御国に昇るための準備をしてくださいます(一四章二、三節)。

III 主の愛により、互いに愛し合うことが求められている

主イエスは昇天されますが、弟子たちは地上で歩み続けることが求められます。しかし、主イエスは、弟子たちをみなしのごのごとく、地上に放り出されることはありません(一四章一八節)。神の国が完成するためには、神の民がすべて主の御前に集められなければなりません。その時に主イエスは再臨され、救いが行われ、神の国が完成します。つまり弟子たちが地上に残り、また私たちが今なお地上に残されているのは、神の国に集められるべき神の民がまだ地上に残されているからであり、私たちは、主を証しし伝道することが求められています。つまりこの時、弟子たちは生き方を変えなければなりません。今までは主イエスに従っておれば良かったのです。しかしその主イエスがおられなくなります。そのために主イエスは新しい掟を授けてくださいました(一三章三四、三五節)。

主イエスが授けてくださる掟は、今まで聖書が語り伝えてきた掟(マタイ二二章三七、四〇節)の延長線上にあります。ただ旧約の時代から主イエスが一緒におられる時代までのように、直接、主なる神が介入されることはありません。主なる神の愛を示し、福音を伝える手段は、私たちの行動を通して行われることとなります。それが伝道であり、神の愛を伝えることによって行われます。つまり、神を知らない人たちに、神のことを伝えよ

うとする時、私たちが主の愛を實踐することによって伝えられます。そして神の愛を指し示すことがどういうことであるかを、主イエスは洗足においてお示しくださいました(一三章一、二〇節)。主の愛を示された者が、主の愛を行うことによって、人々に主の愛を伝え、福音を伝えていきます。

またパウロも「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」と語ります(一コリント一三章一三節)。キリスト教の中心的事柄は三つです。第一に信仰(教理)、第二に希望(救いの確信)、そして第三に愛です。そしてその最も重要なことが愛です。主イエスはこの最も大切な愛を、実践するように求めておられます。実際に、病院、看護師制度、福祉、介護、孤児院など、神の愛を實踐する働きとして開始され、現在では社会に根付いている活動も多くあります。

私は本当に愛の足らない者であることを実感しています。しかし隣人を心から愛し、主の愛を伝えていくこと、それが伝道です。すでに主によって救われ、栄光が約束されているキリスト者が、主の愛を實踐し、主による救いを人々に示していかなければなりません。

「主イエスについて行く」

ヨハネによる福音書一三章三六、三八節

二〇一一年五月二九日

I 主イエスに着いて行こうとする弟子たち

聖書は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」(使徒一章三一節)と語ります。そして主イエスを信じる者は、主の御言葉に聞き従います。しかし、同時に主が私たちに救いの道を敷き、主イエス御自身が生きることの模範をお示しくださっており、私たちは主イエスを信じる時、主イエスに従い、倣うことが求められます。

主イエスはイスカリオテのユダが裏切ること、主イエス御自身がなくなることをお語りになりました(二三節)。しかしペトロは、主イエスが逮捕され十字架の上で死を遂げられることすら理解していません。そのためペトロは、主イエスが捕らえられ十字架に死を遂げられることが考えられず、主イエスは別の場所に行くのだとの思いで質問します(三六節)。しかし主イエスは「わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできない」とお語りになります。ペトロは、主イエスの十字架と死に従うことはできません。しかしこのことは、ペトロの信仰が足らず、弱かったからであるとの理解で留まっています。はなりません。十字架に弟子たちが着いて行くことができないのは、十字架の本質そのものに関わりません。つまり主イエスの十字架は、神の子とされるすべてのキリスト者の罪の刑罰を担われているのであり、救い主としての御子のみが担うものです。そしてキリストは死により、陰府に下られます(使徒信条)。本来、罪人が死に、陰府にくだるものを、御子が担ってくださいました。御子が担ってくださいました十字架・死・陰府下りを弟子たちは担うことはできません。罪に打ち勝ち復活することができないからです。従って、ペトロの離反を考える時にも、私たちはペトロの罪と信仰に目をやってしまいがちですが、十字架の持つている罪の贖いの本質に注目しなければなりません。

II 主イエスのペトロへの愛

その上で主イエスは、「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう」と語られます。ここでペトロの弱さ・罪深さ・おごり高ぶりが露わになります。ペトロの罪と弱さを過小評価してはなりませんし、私たち自身もペトロと同じような罪・弱さ・おごり高ぶりがあつた者として、主の御前に遜り、罪を悔い改めなければなりません。しかし主イエスは、ペトロに対して「後について来ることになる」ともお語りくださいます。主イエスはペトロを愛しておられ、十字架の後のことを見据えて予告されます。

実際ペトロがイエスを知らないと言った時、主は振り向いてペトロを見つめられました。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言わ

れた主の言葉を思い出します。そして外に出て、激しく泣きました(ルカ二二章六一〜六二節)。さらに復活の主イエスがペトロの前で語られたことを確認しなければなりません(ヨハネ二一章一五〜一七節)。主イエスがペトロに離反の予告されたのは、まさに主イエス御自身がペトロを愛しておられ、ペトロが主の僕としての働きを行っていく上で必要なこととして、お語りくださいました。

III 主イエスに着いて行くとは

主イエスはペトロに「後からついて来ることになる」ともお語りになります。主イエスに従うとは、復活の主イエスがペトロにお語りくださったとおり(二一章一五〜一七節)、第一に主の御業を証しし、福音宣教を行っていくことです。ペトロは、主イエスが昇天後、教会の中心的な指導者となり、教会の先頭に立って福音宣教を行うこととなります(使徒言行録参照)。これこそ、私たちにも求められていることです(参照・マタイ二八章一九〜二〇節)。

主イエスに従うもう一つの方法は、主イエスの歩まれた十字架への道に倣うことです。復活の主イエスはペトロに語っていました(ヨハネ二一章一八〜一九節)。ペトロのその後の歩みについては聖書は記しませんが、逆さ十字架に架かったと言う記録が残されており、ユダに代わるマツテヤを含め一二弟子たちが皆、迫害の中、殉教して行ったことが伝えられています。

つまり迫害を恐れず、殉教の道を除外しないことです。キリスト者が殉教することによって、自らの罪の償いをしたり、他の者のための罪の贖いを行うことはできません。キリストの十字架と、キリスト者の殉教は意味が異なります。しかし、主が私たちキリスト者に求めておられることは、神の民として歩み続けることです(参照・ルカ二二章四〜五節)。主によって愛され、主によって救いに導かれている私たちは、主を愛し、主の御言葉に聞き従って歩み続ける時、主による祝福に満たされます。そしてこの時、主は、教会を祝福してくださいます。自らの勝手な解釈によって御言葉を歪めることなく、迫害を恐

れることなく、主を証しし、主の御言葉に聞き従い、信仰の道を歩み続けていきましよう。

「心を騒がせるな」 ヨハネによる福音書一四章一〜四節

二〇一一年六月五日

I 心を騒がせる

主イエスは御自身の十字架を前にして心を騒がせておられました(一二章二七節)。また裏切り滅び行くイスカリオテのユダに心を騒がせておられました(一三章二一節)。そうした状況の中、主イエスは弟子たちに「心を騒がせるな」とお語りになります。両者にどこに違いがあり、主イエスは何を語ろうとされているのでしょうか？

弟子たちが心を騒がせることとなったのは、ユダが裏切るために出て行き、さらに主イエスがいなくなることが知らされたからです。更にこの後、主イエスは逮捕され、裁判にかけられ、十字架に架けられていきます。

では私たちが心を騒がせる時はいつでしょうか？ 三・一一以降がそうですが、危機・試練を迎える時、不安がよぎる時、さらに死の恐れが生じた時ではないでしょうか。

私たちは危機管理することが求められています。危機管理をしっかりと行うことにより、心を騒がせる状態は少なくなります。危機管理を考える時、起こりうる危険を想像して対策・準備が求められます。しかし本当の危機管理は、起こりそうもない危険が発生しても臨機応変に対処する術を身に付けておくことです。畑村洋太郎は、「失敗学のすすめ」で語ります。小さな失敗が積み重なって大きな失敗につながります。失敗をした時、その場を取り繕うだけであれば無意味です。失敗する毎に、失敗の原因を確認し、そして同じ失敗を繰り返さないようにすることにより、失敗が少なくなっていくます。

さて信仰生活の中で訪れる危機は迫害であり、家族や周囲の人々からの反対です。弟子

は迫害の時期を迎えます。三日に大阪府は君が代条例を可決しました。府内の公立小中学校などの学校行事で君が代を斉唱する際、「教職員は起立により斉唱を行うものとする」とし、府立学校など府の施設での日の丸の掲揚も義務化するものです。東京も然りです。震災が隠れ蓑となっていますがナショナリズムという信仰の危機は迫っています。主イエスが「心を騒がせるな」とお語りになったのは、まさにこうしたキリスト者に訪れる信仰の危機、迫害に対して、備えをしておくようにとのことです。神の国が完成しない限り、主なる神に反抗し、キリスト者への反対・迫害はなくなりません。そしてキリスト者はどのような状況の中にあっても信仰を貫き証しすることが求められています。

II 危機に対する準備

では、私たちはどのようにして、信仰の危機に対処し、準備すればよいのでしょうか？ 主イエスはお語りになります。「神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」。主なる神、御子イエス・キリスト、聖霊なる神を三にして一つなる真の唯一の主なる神として、信じ続けることです。主イエスは信じることで、何もお語りになりません。「信じる」ことは、同時に疑わないことです。マタイ一四章二二〜三三節で、主イエスは湖上を歩いて来られます。ペトロも湖上を歩けるように主イエスに頼み、湖上を歩きますが、疑いました。だから溺れそうになりました。私たちに求められていることは、疑わずに信じることで、信じて祈り続けることです。主の御力、主の御支配を信じていることです。

またエフエソ六章一〇〜一八節には神の武器を身に着けるように語られています。つまり自分で解決しようとしなさいことです。主に委ね、主によって与えられる御言葉に従い、主の養いを受け続けることが、私たちがどの様な時にも心を騒がせないための準備となります。

だからこそ主イエスは「引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労をしてはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなだがたではなく、聖霊なのだ」(マルコ一三章一一節)とお語りになります。

Ⅲ 神の御国の喜びに生きるキリスト者

では私たちは何をもって、父・子・御霊なる神が唯一の真の主なる神であると信じることができるのでしょうか？ また心を騒がせる状況の中、どのようにすれば信仰を貫くことができるのでしょうか？ 主イエスは、弟子たちから離れて行かれます。しかし天にあって、主を信じる私たちの場所、つまり永遠の住処を準備してください。

地上にあって、私たちはここが永遠の住処だと思いで立派な家を建てたとしても、一瞬に取り去られます。私たちは今回の震災においてこのことが知りました。そして今なお、多くの人々が苦しんでいます。彼らに起こったことは、私たちに起こってもおかしくなかったことです。主は恵みによって、私たちを憐れんでくださっただけです。しかし、主イエスが天に上られ、準備してくださったっている私たちの住処は、永遠に取り去られることはありません。主の恵みと祝福に満たされた場所です。

私たちはこの後、聖餐式に与りますが、聖餐式は、天における神の国の祝宴の前味です。主は天国において永遠の喜びと祝福を約束してください。だからこそ私たちは、地上にあって心を騒がせる祝福を、誰も邪魔することはできません。だからこそ私たちは、地上にあって心を騒がせる出来事があり、信仰を揺さぶらせることがあっても、心を騒がせることなく、主に委ね、主を信じて、主の御言葉に聞き従った歩みを続けて行くことができます。

「道・命・真理」 ヨハネによる福音書一四章四〜七節

二〇一一年六月五日

序

私たちは旅行に行く時、目的地・費用・交通手段・時間などを確認します。そうすることにより、安心することができます。信仰についても同じことが言えます。

I 神の国につながる道であるキリスト

さて、主イエスが逮捕と十字架の死と弟子たちから離れていくことを語られた時、弟子たちは動揺します。今までは主イエスという導き手がいたために、安心して日々過ごすことができたのですが、安心の拠り所を失うからです。

そしてトマスは、「主よ、どこへ行かれるのか、私たちには分かりません。どうして、その道を知ることができましょうか」と語ります。主イエスが十字架から復活した時、他の弟子たちが復活の主イエスに出会い喜んでいる中、トマスはひとり「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、…わたしは決して信じない」（ヨハネ二〇章二五節）と語ります。トマスは、何事においても慎重です。トマスにとって頼ることができるものは自分の目だけです。神を知らない人たちからすれば、咎められることのない姿です。しかしキリストの十字架の恵みに生きるキリスト者としては、トマスが自らを主なる神に受け渡し、信仰に生きる姿がまったくなく、この世的な姿を露わにしています。神を信じるとは、神がお示しくださっている救いを受け入れ、神にすべてを委ねることです。聖書は、信じることのゴールは救い、神の国における永遠の生命であることをお示しくださっています。そして主イエスは、この神の国である父の家に、あなたがたのため

に場所を用意しに行くとお語りになりました。私たちにとって、ゴールは、はっきりと

しています。しかし、信じることでできない人が多いのです。どのようにすれば、このゴ

ールである神の国に行くことができるか分からないからであり、本当に神の国があるのか

疑問に思うからです。まがいのものが多く存在し、希望が裏切りに変わるからです。

しかし主イエスは、「わたしは道である」とお語りになります。父のもとへ行く道です。

つまり主イエスを信じ、主イエスの御言葉に聞き従うことにより、天国の扉は開かれます。

また主イエスは、「わたしは真理である」ともお語りになります。つまり神の国に導い

てくださる道案内である主イエス御自身が、真理そのものです。

そして主イエスは、「わたしは命である」とお語りになります。主イエスは、この後、

十字架に架けられ、死を遂げられます。キリストは死から三日目の朝に復活され、天に上られ、今も私たちのために祈り続けてくださっています。この命は、「かつてある命」であり、「今ある命」であり、「永遠にある命」です。だからこそ、主イエスと共に歩むことにより、私たちもまたキリストの命、つまり永遠の生命を得られます。

信仰の父と呼ばれたアブラハムは、主の祝福に入れられるゴールが示され、そのために約束の地がどこにあるのか、どのように行けば良いのかは示されませんでした。しかしアブラハムは、主の言葉に従って旅立ちます（創世記一二章一〜四節）。主なる神を信じることは、途中の道がどのようなものであるか分からなくても、その過程もすべてが主によって守られ約束の地に導かれることを信じて、主に委ねて歩みます。

一方エジプトにおいて囚われの身であったイスラエルはどうであったでしょうか？ 主はモーセをお立てくださり、奴隷から救い出し、約束の地に導くことを約束してくださいました。モーセは主を信じ、主から託された御業を行うことにより、エジプトから逃れることができました。しかしイスラエルの民は自分で判断しました。それゆえにイスラエルの民は、四〇年間、荒野をさまようことを余儀なくされました。

神を信じ、救いの道を歩むことは、神の国に行くまでの途中の道も、主を信じて、主に委ねます。主は旧約聖書の歴史を通して約束を果たし、神を信じる民を救いにお与えくださることを、証しています。だからこそ私たちも、主イエスの御言葉に聞き、信じ、主イエスの御言葉に従うことが求められています。

II 道・真理・命

では具体的に、道であり真理であり命である主イエスに従うとはどういうことでしょうか？ 主イエスは、盲人の目を癒し、目が見えるようにしてくださいました。歩けず、寝たきりの人の足を癒し、歩き、働けるようにしてくださいました。主イエスの道に従うことは、私たちが自分で歩き、目的地に向かって歩んでいるという自負を捨てることです。自分で歩こうとすれば、自我の故に、横道に逸れてしまいます。つまり、すべてを神に明

け渡すこと、委ねることです。私たちは毎日の生活をスケジュール管理しています。この時、礼拝の時間、祈祷会の時間、他の集会の時間も、同じような感覚で時間を割いていませんか？ 主は私たちに礼拝することを求めておられます（第四戒・出エジプト二〇章八〜一節）。すべてを支配し、私たちに導いてくださる主の求め・主の御言葉を第一にしなければなりません。神中心、キリスト中心の生活が求められます。

真理である主イエスに従うとはどういうことか？ 主の真理は、律法（十戒）に示されています。ウエストミンスター小教理問答 問八二では、「これらの神の戒めを、だれも完全に守ることができませんか」答「墮落以来、単なる人間はだれも、この世においてこれらの神の戒めを完全に守ることはできず、かえって、思いと行いにおいて、日ごととそれらを破っています」と告白します。罪に汚れている私たちが、真理であるキリストは、真理である父なる神の御座に入れてくださいます。主への恐れ、遜りと謙虚さが求められています。律法に聞き従うことができないう私たちが、なおも律法を果たした者として、無罪と宣言してくださいます。主の救いに生きることが、私たちの生活のすべて、私たちのすべての時間が、主の恵みに生きることであり、すべての時間、主の御言葉に聞き従った、主への遜りと畏れをもって歩むことです。

そして最後に、命である主イエスに従うとはどういうことでしょうか？ 主イエスを信じて歩む者は、主イエスの持つておられる命に与ります。そうであれば、どこまでも、主イエスに従っていきます。このことは、信仰に対する戦い、迫害の時に試されます。この世の権力は、今の時代だけ、一時的です。しかし主なる神が持ち、キリストが持つておられる命は永久です。主イエスに従って、神の国への道を歩む時、耐えることのない永遠の生命の約束されています。主イエスの道に従い、主イエスの真理に従い、主イエスの命を信じて、神の国の希望を胸に秘めつつ、歩み続けましょう。

I 主イエスとフィリポ

主イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことができない。…既に父を見ている」とお語りになりました（六〜七節）。この時フィリポは「主よ、わたしたちに御父をお示しくください。そうすれば満足できます」と語ります。フィリポといえば、主イエスと出会うとすぐに主イエスを信じて、従い、伝道を開始しました（一章四三〜四五節）。またギリシア人が主イエスに会いたいと来た時も、すぐに紹介します（二章二〇〜二二節）。フィリポは、あまり目立つことのない弟子でしたが、主イエスを信じ、忠実に主イエスに従ってきていた弟子です。このフィリポに対して、主イエスは「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっているのか」と語られます（九節）。

II 教理と信仰

フィリポが尋ね求めていることは、御父と御子との関係、つまり御父、御子、御霊なる三位一体なる神を知ることです。聖書が語り、主イエスが語り続けてきたことです。御父・御子・御霊は働きは異なりますが、一人の神であり同一です。だからこそ主イエスは、「わたし（御子）を見た者は、父を見たのだ」と語られます。また主イエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である」ともお語りになりました。真理であり、命である主イエスという道をとることに、御父の所に行くことができます。神は一人であり、御父・御子・聖霊の三つの働きをなしておられます。そして御子を見ると、御父を知ることができません。私たちは御子を目で見ることができませんが、聖書と祈りを通して聖霊との交わりの中にあり、御子により御父との交わりにあります。

しかし私たちが三位一体の神を知的に理解しようとすれば混乱をもたらします。知的理解も必要ですが、主イエスの言葉を信じる信仰が問われています。フィリポは主イエスの御言葉に従ってきました。知的に（理屈で）理解するのではなく、主がお語りになる御言葉を霊的に受入れ、信じ、宣べ伝えてきました。神を信じることは、主イエスの十字架により罪が赦され、神の国に入れられ、永遠の生命の祝福に入れられることを信じることです。これは理屈ではなく、主から与えられる恵みを受け取ることです（参照・ウエストミンスター信仰告白 第一四章「救いに導く信仰について」第一節）。

つまり信仰とは知的な理解によって勝ち取るものではなく、主がお語りになる御言葉を受け入れること、主の御霊が私に語りかけることを受け入れることから始まります。

III 信仰

ですから主なる神の存在を疑うことがあれば、それは神の御霊に委ねておらず、自らの知的判断で解決を求めようとしているのであり、自らの知識と神のお語りになる神知識との間に矛盾があるからこそ、神を疑うのです。神は、天地万物を創造され、無限・不変・永遠のお方です（ウエストミンスター小教理問四）。自然を超えて働かれます。そのため私たちが神のことを自らの知識においてすべてを理解しようとすることは傲慢です。信じるとは、疑わないことです。主を信じ切り、すべてを委ねることです。主は自然を支配され、私たちに生命を支配しておられます。主に不可能はありません。ですから主に祈りを献げる時、「できるならば…」、「可能であれば…」と祈るのは、気がつかないままに、神にも不可能なことがあるものとし、神の御働きを小さくしています。

私たちに求められていることは、キリストの十字架により罪が赦され、キリストによって神の御国に導かれているのであり、父なる神による救いを、疑うことなく信じることです。私たちには疑ってしまう弱さ、罪深さがあります。しかし今、主なる神を求めて教会において主を礼拝していることは、主がお招きくださっているからであり、主の恵み、主の祝福に入れられているからです。つまりすでに主は私たちを捕らえ、救いへと導いてくださっています。疑うことなく、信じる者であることを、主は求めておられます。

主イエスの弟子たち（使徒）には、特別な主からの御業、奇跡を行い、病気を癒す力が与えられます。これらは使徒たちに固有のものです。

私たちは何もできないのでしょうか？ 私たちは、神への祈りが聞き届けられないのではと疑ってしまいます。半信半疑になります。私も例外ではありません。しかしこれこそが不信仰です。主イエスは「もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かつて、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたにできないことは何もない」（マタイ一七章二〇節）とお語りになります。私に力はないですが、私の祈りを聞いていてくださる主には力があります。だからこそ、私の祈りにより、不可能と思われることが可能となります。フィリポが最初、主イエスに出会った時、信じて、福音宣教を行ったように、私たちも、疑うことなく、主がお語りになる御言葉を受け入れ、主による救いを信じるのが求められています。

「主イエスの掟を守る」

ヨハネによる福音書一四章一五〜二一節

二〇一一年七月三日

I 震災以後に生きる私たちに求められていること

震災が発生してから四ヶ月。今なお問題は収まることなく、多くの人々が苦しみの中にあります。私たちは何かを行わなければならないけれどもできない、空回りの状況にあり、それが政治にも表れています。私たちに求められることは行動力であり、それを指揮する指導力です。しかし同時に私たちが闇雲に行動しても、雲をつかむようなものです。

わたしは震災の直後、自らの生活を見つめ直し、主に對する畏れを忘れ、知らず知らずのうちに己が道を歩んできていたことを悔い改めなければならないことを語りました。私たちは、何でもできると思い高ぶり、すべてを支配しておられる主の御前に遜り、主の御

前に立つ自らの姿を確認することを忘れていました。私たちは、悔い改めつつビジョンを作成し、ビジョンに従って行動していくことが求められています。悔い改めない所で、ビジョンを作ろうとしても、小手先、付け焼き刃となります。

ここで私たちが忘れてはならないことは、生きて働く主なる神がすべてを支配しておられる真理の霊であることです。自ら考え、思いつきで行動するのではなく、主による解決を求めなければなりません。多くの人々は、今回の震災を自然災害とその後の原子力発電所の事故を人災と考えます。しかしその背後にすべてを支配しておられる主なる神を私たちは忘れてはなりません。つまり神抜きで復興・復旧を考慮することと、神の御支配の下で復旧・復興を考慮することは、まったく異なってきます（一四章一七節）。

II 一緒にいてくださる聖霊

私たちは、主イエスを目で見ることが、直接話しを聞くこともできません。しかし主は今なお、私たちを支配しておられ、御子に代わる別の弁護者として聖霊をお与えくださいました（一四章一六節）。混沌とした時代にあつて、社会は無秩序になっています。こうした時代だからこそ、私たちは自らが何を行うのか、自分勝手な判断で決めつけ行動するのではなく、主の御霊に依り頼み、主からの声に耳を傾けなければなりません。

そして聖霊は永遠に私たちと共にいてくださいます。私たちが生き、私たちが考える時間、範囲は一〇年、長くても三〇年程です。しかし主の支配は永遠であり、主は永遠に私たちと共にいてくださいます。だからこそ私たちは、主の御声に聞かなければなりません。

III 主イエスの愛、主イエスを愛する愛

さて主イエスは、「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」と語ります（一四章一五節）。闇雲に「主が存在されるから、その御声に聞かなければならない」と、語ったとしても、誰も耳を貸さないことでしょう。しかし主の御支配を信じることが、主の恵みによつて命が与えられた者として、主の愛に生きることを意味して下さいます。主による救いを否定する生き方は、滅びの道です。主は御子をこの世にお送りくださ

り、私たちを救うために、御子を十字架に渡してくださいました。私たちは、主の愛の内
に命が与えられ、罪の赦しと救いが与えられ、永遠の生命に定められています。つまり、
主イエスが「あなたがたは、わたしを愛しているならば」と語られる時、主イエスが私
たちを愛してください、主イエスの愛が十字架によって明らかにされていることが前提に語
られています。

つまり私たちが神の存在を受け入れ、神の愛に生きようとすると、自らの欲のまま、個
人主義的な、主の言葉・律法を無視した生き方をすることはできなくなり、主なる神
は、天地万物を創造され、今なお聖霊を私たちのためにお送りくださり、すべてを支配し
ておられます。そして、主は天地創造をされた時、「我々にかたどり、我々に似せて、人
を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配せよう」
(創世記一章二六節)とお語りになります。神によって管理者とされた人間が、神の秩序
から離れ、己が道を歩んでいた私たちに、震災と原子力発電所の事故を通して、神の御前
に立ち、自らの姿を悔い改め、神の秩序、つまり神の国の完成に向けた歩みをするように
求めておられます。自分たちで管理することができないことが明らかになりました。

神の秩序、神の支配に生きようとする私たちに律法(十戒)をお与えくださいました。
神の御支配にひれ伏し、行いと言葉と心において主の律法に従おうとする時、私たちは神
の国の完成に向けた神の秩序の中に生きることができるようになっていきます。

マタイ一九章には、金持ちの青年の話が記されています。律法を守るとは、十戒の掟
を守ればよいというものではありません。律法主義、つまり律法を守ることにより救いを
得ることができるとの思いは捨てなければなりません。金持ちの青年に対して、主イエス
は語られました。「もし完全になりたければなりません。行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施
しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それからわたしに従いなさい」(一九
章二一節)。つまり、ここで主イエスが問うておられるのは、隣人に対する愛です。

主イエスはマタイ二二章三七〜四〇節でこのように語られています。「心を尽くし、
精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これが最も重要な
第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しな
さい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。』掟を守ること、神を愛す
ること、隣人を愛すること、それらは、別個の問題ではなく、神を愛する心、隣人を愛す
る心が、掟を守ることの基本になればなりません(参照・Iコリント一三章一〜三節)。
愛とは、己の欲望を捨て、神の秩序、隣人の益を求めて生きることです。それは同時に、
隣人に対して罪を批判するのではなく受け入れ、弱さを担うことです。

「あなたはみなしごではない」

ヨハネによる福音書一四章一六〜二〇節

二〇一一年七月一日

序

今回の震災においても、何百人という震災孤児がうまれました。心を許すことのできる
肉親を失った悲しみは、私たちには計り知ることのできない大きな衝撃であったことかと
思います。このような子どもたちに対して、そして私たちに対して、主イエスは「あな
たたちはみなしごではない」とお語りくださっています。主イエスは何を語ろうとしてお
られるのか、主イエスの御言葉に聞かなければなりません。

I あなたは主イエスと出会っているか

主イエスは、直後に逮捕され、裁判にかけられ、十字架に架けられていきます。弟子た
ちは、そのことをはっきりと理解してはいないものの、主イエスが自分たちの前からい
なくなることは臆気に分かかってきておられます。弟子たちにとつて、主イエスはかけがいのな
い先生です。弟子たちは家族も仕事も捨てて主イエスに従ってきました(マルコ一章一六

（二〇節）。弟子たちは主イエスにすべてを託していました。この主イエスがいなくなり
ます。弟子たちにとって、生きる希望・生きる目的が失われる出来事が起ころうとしてい
ます。それはまさに家族を失い、みなしごとなるのと同じ状況です。

さて私たちは今、主の御前で礼拝に与っていますが、私たちにどうして主イエス・キリス
トは、どの様な存在でしょうか？ 弟子たち同様に、本当にかげがいの存在となつて
でしようか？ 神の御子イエス・キリストは、誰でもない、あなたのために、神であられ
ながらも、人として遜り肉の体をとってくださいました。地上において、すべての律法を
まっとうし、あなたの罪を背負って十字架で苦しみ、死を遂げてくださいました。本當な
らばあなたが背負わなければならなかった十字架を、主イエスが背負ってくださいました。
「神を信じる」と言葉で語ることは簡単であり、「信じれば救われる」と聖書は宣言しま
す。しかし今あなたは、あなたのために十字架に架けられたキリストと出会っているでし
ようか？ 私たちは十字架の主イエスと出会い、家族以上にかげがいのない存在として、
主イエスから離れることに脅えるまでに至っているのかが問われています。

II 私たちと共にいてくださる聖霊

では、主イエスはどのような意味で「あなたがあなはみなしごではない」と語られたので
しょうか？ 二つのことが語られています。一つは別の弁護者として聖霊が与えられるこ
とです（一四章一六節）。私たちは、主イエス・キリストを直接見ることができません。
しかし主は別の弁護者として、聖霊を私たちにお与えくださいました。私たちは聖霊を直
接見ることができません。しかし私たちが、神の御言葉により、キリストによつて救いが
与えられたことが示され、同時に、聖霊なる神が与えられ、今私たちが共にいてくださる
ことが示されています。つまり、私たちは救い主イエスが示されているからこそ、聖霊な
る神が働いておられることを知り、聖霊を通して主なる神に祈り求めることができます。
逆の言い方をすれば、聖書によつて語られている主イエスの救いの御言葉に聞こうとはし
ない人は、聖霊なる神がいることを信じることはできません。

「神がおられるかどうか分からない。そして祈っても、すべてが聞き届けられるとも思
っていない。祈りが聞き届けられ、夢が実現すれば、ラッキーだ！」。日本人の多くの人
々は、このように思っているかと思えます。しかし、あなたが主イエスによる救いを受け
入れる時、「この霊があなただけに共におり、これからも、あなたがあなただけの内にいるからで
ある」と主イエスはお語りになります。聖霊がいるのか、いないのか分からないのではな
く、聖霊は私たちが共にいてくださいます。主イエス・キリストがお生まれになられた時、
インマヌエル「神はわれわれと共におられる」（マタイ一章二三節）と呼ばれました。そ
してこの主イエスは、十字架の死と復活を経て、天に上られる時に改めて、「わたしは世
の終わりまで、いつもあなたがあなただけに共にいる」（マタイ二八章二〇節）とお語りくださ
いました。主イエス・キリストは、聖霊をとおして、今も私たちと共にいてくださいます。

III わたしはあなたがたの所に戻って来る！

主イエスが「あなたがたはみなしごではない」と語られた二つ目の理由は、「あなたが
たのところに戻って来る」と語られた主イエスの約束です。主イエスはいつ戻って来るの
でしょうか？ 主イエスの復活の時を考えることができるが、ここでは直接、顔と顔を合
わせて見る時と考える良いでしょう。つまり、主イエス・キリストは十字架の死と復活・
昇天により、弟子たちの前から姿を消されます。そして、私たちも直接主イエス・キリス
トの御姿を見上げることはできません。しかしそれは主イエス・キリストが存在しなくな
ったのではなく、天におられ、再び降りてこられます。その時を私たちは待っています。
だからこそ、わたしたちはみなしごではありません。そして、別の弁護者としての聖霊
をとおして、主イエス・キリストとの交わりにあります。

序

パウロは「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（使徒一章三一節）と語ります。しかしこの時、私たちは救われるとはどういうことか、しっかりと理解しておくことが求められます。

I 「世」の人は？

主イエスを愛し、主イエスを信じる者は、主イエスに愛され、父なる神に愛され、神の救いにあります（一四章一五節、二一節）。

しかしここでイスカリオテでないほうのユダが質問します（二二節）。彼は、主イエスの十二使徒の一人、ヤコブの子ユダ（ルカ六章一六節）、タダイ（マルコ三章一八節）と呼ばれています。しかし彼がどのような人物であったか聖書は語りません。詮索しても無駄です。むしろ、彼は当時のユダヤ人が持っていた信仰に基づいて質問したと考えて良いかと思えます。

ユダヤ人たちは、救い主であるメシアが現れた時、神の民とされたイスラエル（ユダヤ人）は皆救われると思っていました。そして主イエスの弟子たちは、主イエスこそがメシアであると信じていました。しかし、彼は主イエスの語られる言葉から、「ユダヤ人であれば皆が救われる」ことは真実ではないことに気がついたのではないのでしょうか。

これは、神を知らない人が、「神はなぜ信じる人だけを救い、そうでない人は滅ぼすのか」、「神は愛ではないか」との問いかけ同じではないでしょうか。

II 一緒に住む神

主イエスは答えます（二三～二四節）。つまり主イエスを信じ、主なる神による救いに入れられることにより、「父と主イエスと共に住む」ことができ（参照・一四章一～三節）、神の御国、天国に入ることができることを語っています。神は、無限・不変・永遠

の霊です。つまり私たちが主イエスを愛し信じることは、主の無限性・主の不変性・主の永遠性につながるということとなります。私たち人間は、空間的・可変的・時間的に存在しているものであり、神による救いに与ることにより、根本的に生き方が変更します。価値観が変化します。目に見えるもの、地上の栄えを追い求めていても、神の導いてくださる神の御国においては無価値になるからです（参照・金持ちの青年（マタイ一九章一六～二二節）、愚かな金持ち（ルカ一三章一二～一三節））。そして主イエスは、「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」（マタイ六章二四節）とお語りになります。つまり、主イエスを愛し信じる者は、神の御国の価値に従って生きようとしみます。すると世の楽しみに目を向けるのではなく、神の恵みを追い求め、主のお語りになる御言葉に耳を傾け、主を礼拝するものへと変えられます。

一方、主イエスの御言葉に聞こうとはしない者は、神の永遠の祝福を拒絶し、主の祝福に価値を置くことはできず、この世の基準、富・権威・地位に価値を置きます。だからこそ、神の御言葉に聞き従わない者は、当然、神と共に住まうこともありません。

神は、常にあなたを救おうと願っておられ、主イエス・キリストの十字架の御業を受け入れ、主イエスを信じることによつて、救いに導いてくださろうとしています。しかし、主イエスを信じることができず、主イエスの御言葉に聞き従うことができない人は、自らの行いにおいて、主の示される救いから離れて行き、自ら滅びの道を歩みます。

III あなたは本当に神を愛していますか？

では、あなたは主イエスを愛し、信じていますか？ 私たちは一週間の間、神を知らない多くの人たちに囲まれ、社会生活を送っています。否が応でも、「世」の価値観の中に置かれ、引き込まれます。もちろん、神がお与えくださった一般恩恵を、神に感謝しつつ用いていくことはできます。しかし道具を適切に用いていくことと、道具に支配されることとは、異なります。

神の御言葉（旧新約六六巻の聖書）は変化しません。しかし、私たちの心は毎日変化します。「世」の価値観に引きずられません。だからこそ私たちは、真の価値観・希望・喜びを、繰り返し確認しなければなりません。第一に公的礼拝により、御言葉の説教・聖礼典・祈祷・聖徒の交わりを通してです。第二に毎日の家庭礼拝・個人礼拝によつてです。

「平和を与える主イエス」

ヨハネによる福音書一四章二五〜三一節

二〇一一年七月二四日

I 主イエスの語られる「平和」

「平和」とは、戦争がなくて世が安穩であることです。八月に入りますと、六日（広島の原爆の日）、九日（長崎の原爆の日）、十五日（敗戦の日）があり、キリスト教会としても、この月、戦争のない平和な世界を求めていきます。このことは忘れてはなりません。しかし主イエスは、単に戦争のない世界のことを語っているではありません（二七節）。主イエスは、この夜、ユダヤ人たちに逮捕され、裁判にかけられ、翌朝には十字架において死を遂げようとしてきています。そして弟子たちは、主イエスが逮捕されることにより、逃げざるを得なくなり、通常考える平和とはかけ離れた状態です。

しかし主イエスは弟子たちに「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える」とお語りになります。ここで「平和」と訳されているギリシア語は、いままでの聖書では「平安」と訳されてきた言葉であり、ヘブライ語の「シャローム」です。つまりここで主イエスが語る「平和」とは、終末論的な救済、つまり神の救いに与ることによつて獲得する平和であると理解しなければなりません。

II 主イエスの福音を理解した弟子たち

主イエスは、公生涯に出られてから、すぐに弟子たちを召し出し、そして神の国について語り続けてこられました。しかし弟子たちは、主イエスの語られる意味を理解することができませんでした。それは弟子たちが思い描いていた救い、平和とは異なり、主イエスの語られる福音は、終末論的な神の国の完成にむけて語られていたからです（二五節）。しかし主イエスが復活され、弟子たちに会われる時、「あなたがたに平和があるように」（二〇章一九節）と語られ、弟子たちは理解し、（二六節）。そして二九節の御言葉が成就しました。「事」とは、主イエスの十字架から死・復活の一連の出来事です。主イエスが逮捕され、裁判にかけられ、十字架に架けられ、死を遂げられた時、弟子たちは主イエスの言葉の意味を理解することができませんでした。しかし、主イエスが復活を遂げられた時、すべてを理解しました。ここに主の御霊の働きがあります。そして、主イエスが天に昇られた後、弟子たちは約束の弁護者として聖霊なる神が与えられることにより、主イエスによつて宣べ伝えられた福音を宣べ伝えていく者とされます。

宣教の業は、同時に迫害の歴史です。弟子たちは逃げ隠れることもありましたが、同時に、主イエスの弟子たちは、心を騒がせることなく、おびえることなく、勇敢に福音を宣べ伝えました。そしてステファノに始まり、多くの弟子たちは殉教の死を遂げて行きます。迫害が行われる世は「平和」ではありません。しかし弟子たちは、主がお語りくださった「シャローム」、神による救いに与る平安の内に置かれており、さらに、彼らもまた主の救いによる平安を多くの人々に宣べ伝えました。

III シャロームを追い求めよ！

私たちに求められていることは、シャロームを追い求めていくことです。信仰とは、私たちの全人格の問題であり、私たちの魂の問題です。カルヴァンが語ったイザヤ書五五章一〜二節の説教が発見され、それが翻訳され「靈性の飢饉」まことの充足を求めて」という書名にて出版されました。この冒頭でカルヴァンは語ります。「私たちは人間は、自分の感覚に従って生きていますから、空腹ならば食事をし、喉が渇けば水を飲むことは当然のことであつて、あえて誰かに「食べ物を探し求めなさい」などと忠告されなくてもそう

するでしょう。さらに飢饉になれば、獲物を狙って食らう獣のように人間は狂います。そこには「慎み」とか、「人間らしさ」などまったくなくなくなってしまいます。つまり私たち人間は、この世界と今の自分の命にあまりにも心奪われます。それに対して、私たちの魂を養う「霊的な食物」が不足している場合はどうでしょうか。これを必死に探し求めて、これによつて満たされたいとは思わないのです。その結果、自分が滅び行く哀れな状態にあることを感じることもなく、そのまま終わりを迎えます。しかし、ここで私たちは気付くべきです。神はこのような失われて行く人間たちに、計り知れない恵みをもって、語りかけてくださっているということです。主イエスが弟子たちにお与えくださった「平安・シャローム」という救いを、私たちは霊的な渴望を覚え、追い求め、復活の主イエスに出会い、迫害のある中、宣教活動を始めた弟子たちのように、理解しているでしょうか？

「シャローム」は、まさに私たちに与えられている魂の救いです。主がお与えくださったシャロームは、世の支配者が取り除くことはできません（三〇節）。ユダヤ人たちは、主イエスを逮捕し、十字架に架け、処刑することにより、勝利を勝ち取ったと確信しました。しかし、キリストは死に留まり続けることはなさいませんでした。死から三日目の朝、甦り復活を遂げられました。このことこそ、世の支配者、つまりサタンから主イエスは勝利を遂げられた瞬間です（参照・マタイ一〇章二八節）。私たちが主イエスを信じ、神の子となり、神の御国における永遠の生命の祝福に与ろうとする時、世の支配者は、邪魔をすることはできません。この時、私たちの魂は、まさに平安のうちにあります。

魂の糧である平安・シャロームが与えられているからこそ、私たちは、私たちが主なる神・主の平安から遠ざけようとする者がいる時、信仰の戦いを行い、主の平安を保ち続けます。これが信仰の戦いとなります（エフェソ六章一〇〜一八節）。主がお与えくださったシャロームこそが、まことの救いの喜び、祝福です。

「ぶどうの木とその実」

ヨハネによる福音書一五章一〜一〇節

二〇一一年八月七日

I 本物と偽物

今日の御言葉は、加入式・転入式の時に読まれるテキストです。つまり、一つのぶどうの房には数十の実がなっておりますが、ひとつのぶどうの木には、この房が何十と実っております。つまり一つの房が各個教会にあたり、それぞれの教会は一つのぶどうの木に連なっている房です。だからこそ、転入式や加入式では、同じぶどうの木に連なる房に属している者を受け入れるため、信仰を確認した上で、歓迎して受け入れます。

主イエスは「まことのぶどうの木」（一節）と語ります。言い換えれば「まことではな

い偽物のぶどうの木」があります（参照・一章九節「まことの光」）。何事においても、偽物を見破る力を身に着けることが求められるわけで、信仰も例外ではありません。

旧約聖書では、イスラエルはぶどうである主なる神につながるぶどうの木であることが語られています。イスラエルの民は、みずからそこから離れ、偶像に走って行きました（参照・エレミヤ二章二節、イザヤ五章二節）。偽物・もどきの方が、居心地が良く、己の意のままに生きることができからです。しかしここに落とし穴があります。主は、私たちに律法を与え、自らの姿を顧みるように求められます。十戒に示された戒めを、行い・言葉・心において守ることができているかと語られます。自らの弱さ・罪が指摘されることは、非常に苦しみが伴います。しかし、私たちはそれを受け入れ、罪を悔い改め、メシアである御子イエス・キリストの十字架による救いがあること、聖霊による導きがあることを受け入れ信じる時、私たちは本当の主なる神とつながります。イスラエルは、自らの罪を受け入れることができず、偶像に走り、御子イエス・キリストによる救いを受け入れることができませんでした。つまり「まことのぶどうの木」であるキリストが神の御子であることを否定する人たちは、御父・御子・御霊なる三位一体なる神を否定します。従って偽物・もどきではない、三位一体なる神を信じている真のキリスト教会に属する者

は、同じぶどうの木につながるキリスト者であるために、新たに洗礼式を行うことなく、私たちの群れに加わることが許されます。

II キリストにつながるこの大切さ

「わたしにつながっていないながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」(二節)と語られ、信仰の実りとしての伝道や善き業を行うように解釈されることもあります。しかし重要なことは、キリストであるぶどうの木につながり、信仰を持つことです。ぶどうの木につながっていることがいかに大切なことであるかは、主イエスが弟子たちに「わたしの話した言葉によつて、あなたがたは既に清くなっている」(三節)と宣言された言葉にあります。彼らはまだ復活の主イエスに出会っておらず、真に信仰が与えられていませんでした。しかしキリストは彼らがすでに清くなり、救いにあることを宣言してくださいました。重要なことは信仰の実りを確認する以前に、キリストにつながり信仰を持つことです。

ここで、現実のぶどうの実を思い描いて頂きたいと思えます。他の果物や花でも同様ですが、果物が立派な実を実らせるには、木がしっかりと根を張り、その木に実がつながることにより、十分な水分、十分な栄養分を得ることが求められます。実は、自らで栄養を確保し、水分を確保して、実ることなどできません(四、五節)。

III 主の御言葉に聞き続ける

救われるために、伝道しなければならぬ、善き生活を行わなければならぬ、罪を犯してはならない……これは自分で救いを勝ち取るうとする行為であり、「真の信仰」ではありません。私たちがキリストにつながり、豊かな実りをもたらすために求められている水・栄養は、キリストの言葉です(七節)。主イエスの御言葉は、私たちが生きていく上で、永遠に渴くことのない命の水です。

そのため私たちは、主がお招きくださる礼拝に与り、御言葉に聞き、主に委ねて祈りを献げ、キリストの十字架の御業により罪が赦され、神の国における永遠の生命の約束が示

されている聖晩餐に与り続けることが求められています。ぶどうが枝からもぎ取られると、しばらくはそのままの状態を保つことができず、次第にしぼみ、枯れるのと同じように、私たちは主からの御言葉の養いを受け続けなければ、信仰は豊かなものにならないばかりか、信仰そのものが失われ、主から離れ、主の裁きの対象となります。

しかし、私たちが主からの栄養を求め続け、神の民として生きようとする時、私たちは、ただ神の御前で礼拝を献げ、御言葉に聞くに留まることはあり得ません。それは同時に、主がお語りになる御言葉にこそ、命があり、力があるため、主がお語りになる御言葉に聞き従う者へと変えられます。神はあなたを愛しておられます。あなたが罪から離れ、キリストにつながって生きることを願っておられます。そして神の愛は、私たちを御言葉に従う者へと促し、主を愛し、主を礼拝し、隣人に対して互いに愛し合い、助け合う者へと向かわせます。これが主がお語りになる信仰の实りそのものです。その結果として、伝道へと向かい、御言葉に生きるキリスト者として証しする生活へと促されていきます。主がお語りになる御言葉に聞き続けること、御言葉により自らの姿を顧み、悔い改めること、そして主の御言葉に聞き従うことが求められています。私たちはまことのぶどうの木につながるぶどうであることにより、豊かな実が与えられます。

「友となつてくださったイエス」

ヨハネによる福音書一五章一一〜一七節

二〇一一年八月一四日

序

一五章の始めの御言葉により、私たちはぶどうの木である主イエスにつながることで、つまり主イエスを信じることでこそが何よりも重要なことであり、主イエスがお語りになる御言葉に聞き、霊的養いを受け続けることにより、霊的成長が与えられていくを確認しまし

た。その結論が「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである」と語られます(一一節)。つまり、私たちが主イエスに留まり、主イエスを信じることは、神御自身と主イエスの喜びであり、この喜びこそが、主イエスを信じる私たちキリスト者にとっても生きる喜びです(参照・ウエストミンスター小教理問一)。

I 人の傲慢と神の計画

私たちが神を信じ信仰の喜びに生きようと考える時、私たちは「自分自身」を主体に考えてしまい、自分が救いの喜びに生きたければ、自分で神を信じて、神を礼拝していればよいが、そう思わなければ、神を信じなくてもよいし、たとえ神を信じていても神を礼拝しなくてもよいと、考える方もいるかと思えます。

しかし主イエスは「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。：実を結び：わたしがあなたがたを任命したのである」(一六節)とお語りになります。自分で神を選ぶことができると思うことは傲慢・高慢です。天地万物を創造された主なる神の御前に立つ私たちは何者でしょうか？ 私たちの心をすべて知っておられ、それでもなお救いの内に入れてくださっている主なる神の御前に立つ私たちは何者でしょうか？ 主の御前で行い・言葉・心の罪が示された時、私たちは反論することはできません。その上で主なる神は、ヨブ記をおして、主なる神がどういうお方であるかを私たちに示してください(ヨブ三八章二〜九節、四二章一〜六節)。

II 主イエスと私たち

また、私たちが主イエスによって実りを得るように、主イエスは十字架の道を歩んでくださいました。ぶどうの木につながるぶどうが実を結ぶためには水や栄養が必要ですが、同時に害虫を駆除しなければなりません。私たちもキリストにつながるだけではダメであり、根本的な問題である罪が除去される必要があります。生まれながらに持っている罪、そして行い・言葉・心において毎日積み重ねる罪です。私たちが救いに導いてくださる主

なる神は、この私たちの罪の償いを主イエス・キリストの十字架に託してくださいました。他人の生命を助けるために、結果として自ら死を遂げていかれる方がいます。それは善きサマリヤ人への譬え(ルカ一〇章二五〜三七節)で語られている隣人愛です。しかし主イエスの示された十字架の歩みは、人のために自らが死を遂げた他の人たちとは根本的に異なります。主イエスの死は私たちの罪の贖いのためです。このことは、真の神の御子にしかできないことです。ここに神の愛があります(一三節)。神の御子である主イエスこそが、愛の源であり、愛そのものであり、その愛が、弟子たちや私たちに對して示されています。

その上で主イエスは、「もはや、わたしはあなたがたを僕(奴隷)とは呼ばない。：：：わたしはあなたがたを友と呼ぶ。：：：」(一五節)とお語りくださいます。主なる神と私たちの関係は、創造主と被造物、永遠の命を持つ聖・義・真実なお方と死に行く罪人の関係でした。そのお方が、私たちの罪を贖い、救いをお与えくださいました。主が主権者であり、贖い主であり、私たちは主の僕・キリストの僕です。しかし御子が「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」とお語りくださいます。驚くべきことです。

なぜ、主イエスは私たちを友としてくださったのでしょうか？ 神の主権の下、私たち人間は主の操り人形ではありません。主は、私たちを友としてくださり、私たちの思いをくみ取ってくださいるお方です。主は私たちの意志を一〇〇%尊重してくださいます。だからこそ、私たちは祈ることができ、主は私たちの祈りを聞き届けてくださいます(一六節)。別の言い方をすれば、私たちは、キリストを長子とした兄弟姉妹としての関係、つまり私たちは神の子とされたのです(参照・ローマ八章一四〜一七節)。

III 救いの約束と教会の広がり

主イエスは、私たちが神の永遠の計画にあり救いにあることをお示しくださっているからこそ、私たちは努力しなければ滅ぼされるとの恐怖をもつ必要はありません。そして御子の友として、神の子としてのすべての特権が与えられています。私たちが救われるため

に与えられているもの、それは一方的な無償の恵みであり、滅びることのない安心・平安です（ウェストミンスター小教理問三二）。ここに私たちの生きる喜びがあります（一一節）。

私たちに救いをお与えくださっている主イエスが、「互いに愛し合いなさい」（一二、一七節）とお語りになります。信仰とは神とあなたの個人的な関係に留まることはありません。主イエスはぶどうの木とぶどうの関係でお語りくださいました。一つのぶどうの木につながる実として、主イエスによって愛され、豊かな実りがもたらされることにより、互いに愛し合います。そして主によって与えられた喜びは、自然と広がりを見せます。

主イエスは十字架の死にいたる愛を私たちにお示しくださいました。愛し合うとは、犠牲が伴います。しかしこの犠牲は、主によって与えられた喜びに比べれば、取るに足らないことです。だからこそ愛し合うことができます。この犠牲を伴う愛が、教会の中では聖徒の交わりとして表れ、ディアコニア（執事的働き）となり、また神を知らない人たちに對しては、愛の交わりをおして、キリストの福音を宣べ伝えていくこととなります。

「キリスト者を憎む者」

ヨハネによる福音書一五章一八〜二五節

二〇一一年八月二日

I

主イエスは最後の晩餐において説教を続けておられます。一五章の始めではぶどうの木の話しを行い、ぶどうである私たちは、ぶどうの木であるキリストにつながることに、豊かな実りをもたらさし、神の救いにあることが語られてきました。ところが今日の御言葉においては、「世はあなたがた（キリスト者）を憎む」とお語りになります。両者の話しが乖離しているようですが、キリストにつながることは、同時に世から選り出されたのであり、それは世とは異なる者となったことを受け入れなければなりません。

主イエスはこの夜、逮捕され、弟子たちから離れて行きます。つまり今まで、弟子たちをユダヤ人たちが守り、盾となつてくださった主イエスは、弟子たちの前からいなくなり、そのために、主イエスが逮捕され、弟子たちの前からいなくなり、弟子たちは自分たちで、ユダヤ人たちに対して対処しなければならなくなります。

事実、主イエスが逮捕された時、恐ろしくなり、散っていくわけであり、ペトロは、翌朝の鶏がなくなつて三度、主イエスのことを知らないことと離反してしまします。

ここで私たちが今日与えられた御言葉から考えなければならぬことは、①ぶどうの木につながる、救いに導かれたキリスト者とは、社会である世からすればどの様な存在であるのか？ ②キリストにつながるが、社会を形成している世とは何か？ の二つです。

このことを考えるに先立ち、そもそも神の御子であるキリストがなぜ人となられたのかを確認しておかなければなりません。福音書記者ヨハネはこのように語り始めます。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。…言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」（一章一〜五節、参照・一章九〜一〇節）。だからこそ、キリストを信じ、キリストにつながることは、キリストの光に入れられ、キリストの命に与り、天国における永遠の祝福に与ります。一方、キリストにつながるが、キリストに属していない者は、闇に属する者であり、光を理解することができません。ここに、世に属する者が、キリストにつながる者に対する対立の構図が露わになります。

II キリスト者と世

私たちは確認しなければなりません。皆さんは日々の生活にあつて、信仰の格闘を行いつつ、生活をしているでしょうか？ 主イエスは「あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わ

たしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである」（一九節）とお語りになります。真のキリスト者であれば、毎日の生活にあつて信仰の格闘があります。主は「あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をすることも、すべて神の栄光を現すためにしなさい」（イコリント一〇章三二節）とお語りになり、インマヌエル（神、我と共におられる）であり、神の御前に、改革派教会は有神論的・人生観・世界観を確立することを求めています。

食べることに、飲むことにおいて、神を覚えて、神に栄光を現すために行うことと、そうでないこととに、どこに違いがあるのでしようか？ 神を知らない人も、農作物などを作つてくださった方々や、調理してくださった方々に感謝して食します。しかし神を信じ神の御前に生きる時、考え方は違つてきます。農作物に感謝するにしても、農家の方々への感謝と共に、農作物に光を与え・水を与え・成長させてくださった主なる神の恵みを忘れません。神の恵みがなければ、農作物は育たないからです。

キリスト者は、キリストの十字架によって罪が贖われ、救いに入れられた者として、キリストにつながっています。キリストから、真の榮養である靈的御言葉の養いを受けているからこそ、生きることができます。キリスト者はキリストの御言葉に倣い、主を礼拝し、隣人への愛を貫きます。キリストの十字架が一方的であるように、キリスト者の隣人への愛も隣人に対して報いを求めるものではありません（例・サマリア人への譬え（ルカ一〇章二五節以降））、金持ちの青年に対する主イエスの答え（マタイ一九章六〇二二節））。

一方、暗闇の中、つまり世に属する人々は、生活の目的が異なります。生きる目的は最終的には自分のためです。愛の業を行う時も、何らかの見返りを求め、期待しています。金銭的なこと・地位や権力・人々からの賞賛……。ボランテニアという名において、人々からの賞賛、感謝、自分自身の思いの満足感を求めます。

キリスト者によって無償の愛、見返りを求めない愛が示される時、相容れません。ここに衝突が起こります。だからこそ、キリスト者としての歩みを続けて行こうとする時、そ

れは天における祝福であり、神と共に歩む恵みと祝福に富んだ人生となるのですが、一方地上では、世からの障害・避難・批判・迫害を避けて通るはできません。

III 伝道の祝福

サマリア人のように、隣人を愛し、見返りを求めず、心から誠心誠意行うことが主の求めです。こうした行いは、まさにディアコニア（執事的活動）としての教会の業であり、同時に、人々にキリスト教を伝える伝道そのものです。

ボランテニア的なものや福祉活動においては、人々はキリスト者の行いを受け入れるでしょう。しかしキリスト者として、キリストを証しするため、キリストの栄光のために行つているという動機・目的は、彼らは理解できません。キリスト者の行いと目的が示され、キリストが証しされながらも、それを拒否し、拒絶する者は、神に敵対する者として、キリスト者に対しても対抗してきます。しかし同時に行いをおして、キリストが証しされ、そしてキリストを受け入れて頂く時、伝道が実りをもたらします。

「主イエスを証しする」

ヨハネによる福音書一五章二六〜二七節

二〇一一年八月二八日

序 万人預言者

キリスト者である以上、伝道することが求められます。誰が伝道するのか？ キリスト者すべてです。牧師・教職者が行えばよいものではありません。プロテスタント教会では、万人預言者という言葉があります。御言葉である聖書を読み、解き証しをすることは、万人（すべての人たち）に与えられている恵みであり特権です。

だからこそ私たちは、毎日、主がお語りになる御言葉である聖書と格闘し、神から下記の言葉を確認しなければなりません。①神は何を命じておられるのか。②神が私たちに

与えくださった約束は何か。③神に対して何を求めて祈るべきか。④私たちの避けるべき罪は何か。⑤私たちが従うべき模範は何か。

I 伝道を行え!

「御言葉を宣べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい」（Ⅱテモテ四章二節）と語られます。しかし、伝道することが目的化し、「伝道しなければ救われない」と語り、伝道が律法化することは避けなければなりません。

それではなぜ、私たちは伝道に携わることが求められ、また何を宣べ伝えるのでしょうか。もちろん救い主である主イエスの命令があるからです（ヨハネ一五章二七節、マタイ二八章一九〜二〇節）。一方、福音を伝える時、人々は耳を貸さず、信仰の戦いが生ずることも主イエスは忠告してくださいました（ヨハネ一五章一八〜二五節）。しかし、福音を伝えることを恐れたならば、信仰は個人化してしまい、信仰は内に籠もってしまいます。

II 伝道の原動力

ではどうすれば、キリスト者は主の命令に従った伝道を行うことができるでしょうか？伝道を行う原動力は、私たちがキリストであるぶどうの木につながれたぶどうの実である事実です。つまりあなたは、キリストの歩まれた十字架の贖いにより罪が赦され義とされ、神の子とされ、聖とされています。その結果私たちは、世に属する闇ではなく、永遠の命である光の内に歩む者とされました。これは主から与えられた恵みであり祝福です。

それと同時に、今、私たちは一人ではありません。キリストは十字架の死と復活の後、天に昇り父なる神の右に座しておられます。しかし、キリストは父なる神の御許から弁護者として聖霊をお送りくださいました。弁護士とは、裁判で被告人に代わって無実を立証する働き手です。そして弁護士には資格が必要です。弁護者である聖霊は、第一に私たちの罪を贖い、私たちを救ってくださいました御子御自身がお遣わしくくださいます。私たちは御子の御業に感謝するように、御子が遣わす弁護者に、すべてを委ねることができます。第二に、聖霊は父なる神のもとから来ます。このことは、神の子とされた私たちが、どの様

な時にも父なる神の守り、弁護があることを物語っています。

伝道を行い、主を証しすることがあなたに任せられていると語れば、重圧がかかります。しかし父・子・御霊なる三位一体の神を私たちは信じており、その第三位格である聖霊が私たちと共にいてくださいます。あなたは一人ではありません。肩の荷を降ろすことができる慰めがここにあります。

さらに主イエスは、この聖霊が「真理の霊」であると語られます（二六節）。つまり霊もどき、偽りの霊が多くあります（参照・Ⅰヨハネ四章一〜六節）。真理の霊と惑わす霊を見分ける基準は、キリストによつて遣わされた霊であるかどうか、御父のもとから遣わされた霊であるか、つまり三位一体の神の御霊であるかどうかによります。だからこそ、私たちが真理の霊である聖霊が共におられ、聖霊が私たちが語るために必要な言葉をお与えくださることを信じて、宣べ伝えることが求められています。

III 伝道する時の注意点

私たちがキリストの福音を宣べ伝える時の注意しなければならぬことがあります。それは、私たちは伝道し、福音を宣べ伝えていけば良いものではありません。この時、人々は、語られる福音を聞くと同時に、福音を語る私たちの姿を見ています。人格が問われます。つまり福音を語ろうとする時、福音に生きている生活、福音に生きる喜びが伴っているかが問われます。つまり生活において福音を着飾っているかが問われています。

私たちの救い主である神は、最後の審判において、私たちに罪の赦しを宣言し、神の御国に入れてくださいます（参照・Ⅰテモテ四章一節）。救い主である神が、インマヌエル「神、我らと共にありますもう」です。私たちは、飲むにも食べるにも何をするにも神の栄光のために行うのであり、私たちは一時も神の御前から離れることはありません。今、主の礼拝に臨んでいる時はもちろん、礼拝から帰って家庭にあっても、それぞれの働きの場・学びの場に遣わされても、主は常にあなたの御前にあり、共におられます。

常に主の御前にあるのであれば、行いと言葉と心のすべてを御覧になる主なる神は、常

にあなたの罪を指摘され続けます。それでもなお主はあなたの罪は、イエス・キリストの十字架の贖いによって罪が赦され、救われていることを宣言してください。ここに悔い改めと救いの感謝が湧き出て、主の御前と人々の前であって謙虚と遜りが生じて来ます。これが主の御前であって、主を愛し、主を礼拝するものとされ、隣人を愛し仕える者として、キリストに倣う生活によって、キリストを証しする伝道の原点となります。

だからこそ、キリストを証し宣べ伝え、また信仰の継承を行う時、何よりもあなた自身が信仰の喜びにより、御言葉の養いによりつつ、救いの喜びを持って信仰生活を送り続けることが求められています。

「キリストの言葉を思い出せ」

ヨハネによる福音書一六章一―四節

二〇一一年九月一日

I つまづき

主イエスは、「これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがつまづきことのないためです」とお語りになります。キリスト者としてのつまづきとは、信仰につまづき、神から離れることを語ります。教会に来たことがある人が、すべて主イエス・キリストを救い主として信じて、信仰生活を続けるわけではありません。時には、信仰告白をして洗礼を受けた人であっても、教会から遠ざかる人もいます。つまづきの原因は、神に対して信仰そのものに対して無関心となるか、拒絶する者もありますが、教会員の言動に対してつまづきを覚えることもあるかと思えます。

「つまづき」と訳されているギリシャ語は「邪魔、誘惑」とも訳される言葉です。つまり私たちが神を信じようとすることを邪魔する者の存在があります。信仰に対するつまづきを私たちが考える時、個人的な信仰、他人との関係と、私たち自身の問題として考えて

しまいます。しかしギリシャ語から考える時、つまづきは一方であって、サタンからの誘惑でもあることを忘れてはなりません。言い換えれば、神を信じる、信じない、人につまづく、つまづかないと語る時、私たちを救ってくださるうとしている主なる神のお働きがあり、それを邪魔しようとしているサタンの働きがあります。つまり主なる神は、教会に一人ひとりをお招きくださいます。そして礼拝を通して、特に福音が語られる御言葉の説教を通して、罪の赦しと救いをお示しくださいます。信じる者は、皆救われます。主のそうしたお働きがある時、同時に私たちを主なる神から引き離そうとする力、サタンの誘惑があります。それが人との関係において表れます。

II 真のキリスト者、偽キリスト者

主イエスは、どの様な人たちが、弟子たちや私たちをつまづかせ、神による救いの恵みから引き離そうとしているかをお語りくださいます(二―三節)。「あなたがたを殺す者」とは、迫害者のことです。つまり私たちは信仰を貫くためには、何らかの形での迫害を避けて通ることができません(一五章一九節)。特にキリスト者が極少数の日本では、私たちが神を信じる時、周囲の人々との関係が変化することを恐れてはなりません。

主イエスは「あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る」とお語りになります。ここで主イエスはユダヤ人のことを語っておられるのですが、彼らは自分たちがアブラハムの子であり、神の救いにある神の子としてのイスラエルであると自負し、疑う余地はありませんでした。神を信じていると公言し、自分たちも信じて止まない人々が、本当の意味での福音から離れ、自己に立ち、そして神を信じる者たちクリスチャンを迫害することは、時代が下つてからも繰り返されていきます。彼らは自分はクリスチャンだと思っているからこそ、教会は対応が難しくなります。

ローマ教会が墮落し、免罪符を販売することにより救いを売買する状況になり、宗教改革が発生しますが、「自分は神に奉仕していると考えている」ローマ教会が、聖書を福音的に解釈し、教会の腐敗に対して声を挙げたルターを初めとする改革者たちに対して、迫

害をします。その結果、教会は分裂しました。戦時中の日本の教会も同様です。「神社は宗教に非ず」との声に迫害を恐れて神社参拝を行っていく教会に対して、神社参拝は偶像礼拝であるとして、美濃ミッシオンは行動します。そうした時、同じプロテスタの教会の牧師が、「非国民」として、美濃ミッシオンを迫害していきました。つまり迫害とは、神を拒絶する人たち、自らを神格化しようとしている為政者たちから起こるのですが、神を信じていると自認しているいわば身内からも起こります。

私たちも自らの信仰を確認しなければなりません。感情のもつれによるつまづきは避け、取り除かれなければなりません。しかし努力によって改善できることではありません。私たちに問われていることは自分自身の信仰を確認することです。主イエスが語られる迫害者の姿は御父をも主イエスも知りません。それは神による救いを求めながらも、律法主義となり、自分の義により救いを獲得しようとしている者の姿です。つまり、私たちが「神を信じる」と語る時、私たちは父なる神による救いのご計画を受け入れ、キリストの十字架の贖いによって罪の赦しが成し遂げられ、神の国における永遠の生命を受け入れ信じているかどうかを確認しなければなりません。キリストの十字架による救いを受け入れることは、自らの罪を受け入れ、悔い改めることです。神の一方的な愛による救いを受け入れることであり、神に愛されている者として、神を愛して神のお招きくださる礼拝に集い、隣人を自分のように愛します。つまり私たちは自らの信仰を確認することにより、誰に対してもおごり高ぶることなく謙虚と謙遜をもつて接するようになります。

つまり隣人との関わりとは、行い・努力によって成し遂げていくことではなく、主の御前に自らの信仰を確認することにより、変えられていきます。ここで私たちに求められていることは、自らの信仰を顧み、悔い改めと救いの喜びに生きることです。

また、信仰を保っている時に犯す他人へのつまづきに対して、ウェストミンスター信仰告白第一七章「聖徒の堅忍について」第三節で語られています。非常に慰めに富んだ告白です。一時的な主の裁きはあつたとしても、滅びの宣言ではありません。

Ⅲ 神の救いの約束に生きる喜び

一方、私たちが信仰を貫こうとする時、つまづきを与えようとする誘惑・迫害から逃れることはできません。「そんなことをしてまで、神を信じるつもりはない」とも言われることでしょうか。しかし主イエスは、信仰の弱い弟子たちに対して、そして信仰の弱い私たちに對して、「しかし、これらのことを話したのは、その時が来たときに、わたしが語つたということをおあなたがたに思い出させるためである」とお語りくださいます。ここに神の愛があります。

主イエスは、何をお語りくださったのでしようか。「あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した」（一五章一九節）と宣言してくださいました。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である」（同一節）、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに身を結ぶ」（同五節）とお語りくださり、「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる」（同七節）と語りくださっています。私たちが、父なる神、そして救い主イエス・キリストを信じるならば、私たちは、救われ、神の国・天国において永遠の生命に与ることが許されます。そのことを確認するため、私たちはこの後、聖餐の礼典に与ります。パンとぶどう酒に与ることができるとは、信仰を告白した人たちだけです。これから信仰を告白しようとする人たちも、この礼典によって、同じ交わりに入れられる確信を持って頂きたいと思えます。それと同時に、この世にあって、神を知らない人たちからの迫害・虐げはありますが、それ以上に、主が共にいてくださるからこそ、私たちの祈りは、すべて主によってかなえられ望みがあります。

I 眞実に語る

ユダヤ人たちは、旧約聖書において約束されていたメシアが到來すると、ローマからイスラエルが解放され、そして神の国が完成することを信じていました。そして、主イエスの弟子たちは、目の前にいる主イエスこそが約束のメシアであるとの確信を持っていました。それがペトロの言葉に込められています（ルカ二二章三三節）。

しかし最後の晩餐で、主イエスが弟子たちから離れていくこと、弟子たちに迫害が起こることが語られることにより、弟子たちは動揺します（六節）。

主イエスは既に、主イエス御自身がなくなり、迫害が発生したとしても、あなたがたは守られることを約束し、希望をもって歩むように語ってきました。ここで主イエスは「実を言う」と語ります。「実」とは「真理・眞実」のことです。人を騙そうとする人たちは、「確実に儲かる」と語ることでしよう。「眞実」という言葉は、嘘として語ることもできません。しかし、私たちに「眞実だ」とお語りくださっているお方は、神の御子であるイエス・キリストです。人と違つて神は、まったく眞実な方ですから、罪を犯すこと・嘘をつくことができません。ですから、このお方が「眞実だ」と語られる時、「嘘だ」と思つてしまふ心を打ち消し、主イエスの語られる言葉を眞理として耳を傾けなければなりません。

II 主イエスが去つて行かれることの恵み

ではなぜ、主イエスが弟子たちの前から去つて行くことが、弟子たちのためになるのでしょうか？ 第一に主イエス御自身が去つて行かれることによつて与えられる恵みがあります。主イエスが逮捕され、十字架に架けられることにより、私たちの罪が償われ、私たちは救われました。そして、私たちが担わなければならなかつた罪の刑罰としての死が、

取り除かれます。イエス・キリストを神として受け入れ、告白すれば良いのです。そして主イエス・キリストは、十字架の死から三日目の朝に甦つてくださいました。主イエスの復活は、キリスト者に、肉の死を遂げても復活の体を与えられる希望の約束を与えます。

また、主イエスは復活の後、天に昇つて行かれました。主イエスは「あなたがたのため」に場所を用意したら、戻つて来て、あなたがたをわたしのもとに迎える」（一四章三節）とお語りくださいました。主イエスが弟子たちの前から去つて行かれることにより、キリスト者は、信仰により永遠の生命が約束され、神の国において、恵みと喜びをもつて主を讃美しつつ生きる事ができる場所が約束されます。だからこそ主イエスが弟子たちから離れること、言い換えれば、今、私たちが直接主イエス・キリストを目でもつて見る事ができないことは、私たちが救いの恵みに入れられている証拠です。

III 弁護者・聖霊が与えられることの恵み

また主イエスは、弁護者・聖霊が世に來ることが私たちのためになるとお語りになります。聖霊の時代は終末の時代、神の国の完成に向けての歩みの時です。神の国が完成する時、神の民は集められ、そうでない人たちと分けられます。主イエスは毒麦の譬を話されました（マタイ一三章）。良い種が蒔かれている麦畑に毒麦も蒔かれています。それが混在しているのが現在です。今は良い麦が抜かれることを防ぐため、収穫の時まで一緒に育て、収穫の時に良い麦のみ収穫され毒麦は焼き払われていきます。弁護者・聖霊の働かれる時代は、まさに神の国の完成に向けての時代であり、神の民とそうでない者たちが區別されていきます。主イエスはそれを、罪・義・裁きの三つにおいて説明致します。

①罪について・この世の人々は、自らの姿を知りません。なぜなら、世の人々は相対的な関係においてしか罪を考へることができないからです。そのため、自らが罪に汚れ、救いが必要であることが分かりません。しかし御霊によつて示された御言葉は、福音宣教によつて、律法をお示しくださいました。律法は、社会一般の相対的な善悪のみならず、自らの罪の姿を明らかにします。だからこそ神によつて集められる民は、聖霊の働きにより、

主の御前に集められ、自らの罪の悔い改めへと促されていきます。一方、そうでない者たちは、自らの姿を受け入れられず、神を信じる事ができません。

② 義について・前述のキリストの十字架により明らかにあります。
③ 裁きについて・キリストの十字架は、神の民に対しては罪の赦しと救いを提供しましたが、そうでない者たちに対しては、神への不従順・傲慢さ故に、裁きが示されました。裁きは脅かしではありません。私たちは第一のものを第一にすること、すべての支配者・贖い主を受け入れ、聞き従うことが求められています。

IV 裁きの遅延

最後に一つ付け加えます。まだ収穫の時は来ていないという事実です。まだ良い麦としての神の民が、すべて主の御前に集められていません。だからこそ、私たちは伝道する事が求められています。神は、すべてを滅ぼす恐ろしい神ではなく、信じる者はすべて救ってくださる愛の神であり、今なお、人々に罪の悔い改めと救いを指し示してください。どうか、主の愛を受け入れ、信じて頂きたい、宣べ伝えて頂きたいと思えます。

「真理の霊」

ヨハネによる福音書一六章一二〜一五節

二〇一一年一〇月二日

I 御言葉と聖霊

主イエスは、逮捕され十字架に架かろうとされています。主イエスが宣教活動を始め、弟子たちと出合ってから三年程です。寝食を共にして、主イエスは弟子たちに語りたいたいがまだあります。弟子たちもイエスがおられなくなることに不安を持っています。私たちも不安が一杯です。私たちは弟子たちより遙かに訓練不足であり、無知、粗野です。そのため、時が限

られていると痛感させられている点では似ています。しかし、これで時間切れであり、主イエスは私たちの救いのために必要なすべてのことを語ることなく、天に昇られたのではありません(Ⅱテモテ三章一五〜一七節、黙示録二二章一八〜一九節、ウエストミンスター信仰告白一章六節)。

ただこの時の弟子たちは、主イエスの言葉を理解することができませんでした。知識を蓄え、頭の中で理解したとしても、信仰的に用いる生きた知識ではありませんでした。この時弟子たちは、真理の霊が下る時を待つ必要がありました(一三節)。事実、弟子たちは、主イエスの十字架と復活、そして聖霊が与えられることにより、すべてを理解し福音を宣べ伝える者とされていきます。つまり主イエスは、この時まだ言いたいことは残っていました。弟子たちが主イエスを信じ福音を宣べ伝えるに必要なことはすべて語ってきていました。主イエスの教えと御業、聖霊が宿ることにより、弟子たちは理解することができました。主が御霊を通して、彼らに信仰的に理解する能力をお与えくださいました。まさしく奇跡であり、賜物として与えられました。私たちも同じです。聖書や神学の知識に長けた方はいます。自らの知識を誇り、人を裁いてしまえます。そこに聖霊が宿っておらず、聖書知識が信仰となっていないからです。一方、聖書知識抜きに霊が宿ったのであれば、真理である主イエス・キリストによって救いに導かれることが示されず、真の信仰にたどり着くことはありません。聖霊単独の働きではなく、御言葉と結び付いての働きが特に重要です。つまり御言葉が説き明かされ、そこに聖霊の養いがある時、人は主による救いを受け入れ、真実の信仰へと導かれ、この時その人は主の御前に罪が赦されたことによる謙虚と遜りが生じ、主の御言葉に聞き従う謙遜が生じます。

II 三位一体における聖霊の位置づけ

では聖霊とはどういう存在なのでしょう？ キリスト教会は、歴史的に御父・御子・聖霊を三位一体の神として、信じています(参照・ウエストミンスター信仰告白第二章三節、同大教理問八〜一一)。そして私たちは、御子を中心に聖書を読みます。ヨハネによ

る福音書は、御子が御父との関係について繰り返し語り、最後に御父・御子と聖霊の関係を示します（一三b〜一五節）。つまり御父・御子・聖霊を別々の働きとして理解せず、三者のつながりを確認しなければなりません。

III 三位一体なる神

御父は、すべてをご計画し、私たちの救いも予定してください。同時に、天地万物の創造から始まり、すべてを守り、御子をこの世にお遣わしくくださいます。そして、御子に救いの御業を行わせ、救いの福音を御子を通して伝えるように示してください。そして御子は、地上において私たちが救うために、律法につかえ、そして十字架の御業を成し遂げ、さらに御言葉として、私たちに福音を伝えてくださいます。しかし御子の御業と御言葉は直接、私たちに届くことはありません。御子は救いの御業を終えると天に昇られ、御子の御業と御言葉は、聖霊をとおり私たちに伝えられます。だからこそ私たちは、礼拝の説教で聖書知識を学ぶことだけとってはなりません。説教で御言葉の説き明かしがなされると同時に、聖霊の働きを豊かに受け入れなければなりません。つまり自ら学び、神の真理を知ろうとするのではなく、主が御子により聖霊によってお語りくださる福音を、私たちは受け入れるために心の扉を開かなければなりません。

主の晩餐も同じです。聖餐式は、目に見え、口で味わえる説教であると語られます。一方、御子の十字架の御業によって与えられた私たちの救いを想起するわけであり、他方、主がお与えくださる神の国における晩餐に招かれていることを確認し、前味を味わうものです。聖餐に与ることにより、この恵みにあることを覚えることができるのであり、それは聖霊の交わりによって、私たちは理解することができます。

私たちは今も、真理の霊としての聖霊が私たちに宿ってくださいているからこそ、救いを受け入れ、救いの喜びに生きることができ、礼拝に出席することがゆるされています。私たちの願いを祈ることができるのも、私たちの祈りを聖霊が受けとめてくださり、御子によって、父なる神に伝えてくださることにより、その祈りが聞き届けられるからです。

御子イエス・キリストの十字架の御業と共に、今、私たちに聖霊が与えられていることに、心から感謝しつつ、喜びをもって、日々、歩み続けていたいただきたいものです。

「しばらくすれば……」

ヨハネによる福音書一六章一六〜二四節

二〇一一年一〇月九日

序

今、日本は、目に見えない恐怖・放射能に脅えています。この放射性物質の量を測る単位としてベクレル、ミリ・ベクレル、マイクロ・ベクレルが用いられます。「ミリ」は千分の一ですが、「マイクロ」とは一〇〇万分の一です。この「マイクロ」という言葉は、ギリシヤ語から来ており、「少し、少ない、僅かな、ちよつとした」とした意味であり、今日のテキストにおいても用いられており「しばらくすると」と訳されています。

I 受難の三日間

主イエスは「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる」（一六節）とお語りになります。この言葉に対して、弟子たちの間で疑問がわき上がります。私たちは、主イエスの言葉を、主イエスの十字架の歩みをすべて知った上で、確認しています。しかし、私たちは主イエスが語られた言葉の意味をしっかりと理解しておかなければなりません、繰り返し返して語られる「しばらくすると」という言葉に込められた主イエスの思いを確認しなければなりません。

主イエスが語られているのは、最後の晩餐においてです。ヨハネによる福音書では一三章から説教が始まっています。主イエスは数時間かけて語られたのではないのでしょうか。そして主イエスは、最後の晩餐の説教を語り終えると、ゲツセマネに行かれ祈りを献げられ、その場で主イエスは逮捕されました。この時ペトロを初めとする弟子たちは逃げ、主

イエスから離れて行きました。主イエスが今説教を語られている時から、僅か数時間の出来事ではないでしょうか。ここに主イエスの言葉は成就します。

その後、主イエスは、裁判を受け、翌朝には十字架に架けられ、そしてその夕べには十字架上で死を遂げられます。つまり主イエスが「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなる」と語られたことは、主イエスの逮捕と、主イエスが死を遂げられることの二つの意味が含まれていると言ったことが言えるでしょう。

しかしこの時、主イエスは、「はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ」（二〇節）と語られるばかりか、すぐに「あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる」と語られます。そして主イエスが「またしばらくすると、わたしを見るようになる」と語られていたこと、つまり主イエスは十字架の死から三日目の朝に甦り・復活されることをお語りになっています。まさに「わずか、またたく間」の出来事として成就していきます。

II 主の考えておられる「すぐに」とは…

わたしは、主イエスが「あなたがたはもうわたしを見なくなる」ことに対して二重の意味があることを語りましたが、「またしばらくすると、わたしを見るようになる」ことも、二重の意味を考えなければなりません。つまり、主イエスの再臨と神の国の完成の時は、主イエスの弟子たちがそうであったように、その時代時代に生きているキリスト者は、この時を今日か明日かと待ちわびています。

しかし、二〇〇〇年経った今なお、この時は訪れていません。主イエスは嘘を語ったのでしょうか？ 私たち人間の生涯が八〇年、九〇年だと言うことからすれば、非常に長い年月であり、「またたく間」とは決して語ることができない年月が流れました。しかし、天地万物を創造し、すべてを御支配になられている主なる神からすれば、この期間は決して長い時ではありません（Ⅱペトロ三章八、九節）。主にとつて千年は一日のごとくです。そして主はすぐに（マイクロ）来られることを繰り返して約束してください（ヘブ

ライ一〇章三六、三九節、黙示録六章一一節）。

主は「すぐに」とお語りになりつつ、なお遅延しておられる理由は、神の民がまだすべて集められていないからです。主の思いとしては「すぐに」ですが、今、神の国が完成しますと、本来そこに入るべき神の民が、そこから落ちてしまいます。主はそうした心ないことはされません。だからこそ私たちは、この神の愛と忍耐を理解しなければなりません。神の民は誰一人、滅びてもいけないからです（参照・ウエストミンスター信仰告白第二章）。

III 伝道することにより「すぐに」を待とう！

だからこそ主イエスは宣言してくださいます（二二節）。「わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」私たちに与えられる救いの喜びの時、それは「すぐに」来ます。この時には、悲しみも苦しみもありません。この神の約束が私たちに与えられています。だからこそ、私たち自身が神の救いの希望と喜びに満たされつつ、かつ神の民がすべて満たされるように、一人ひとりが主による救いを証ししていただきたいと思えます。

「願いなさい。そうすれば与えられる」

ヨハネによる福音書一六章一六、二四節

二〇一一年一〇月一六日

I 「喜び」にも永遠性がある！

主イエスは繰り返し「喜ぶ」という言葉を用いますが、そもそも「喜ぶ」とはどういうことでしょうか？ 嬉しいことです。通常はその時の感情を表す言葉です。しかし主イエスは「喜びで満たされる」と語ります。永遠に継続するものであると語られます。

先週「しばらくすれば（マイクロ）Ⅱすぐに」という言葉をキーワードに御言葉より確

認しました。つまり「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなる」とは、①主イエスの逮捕と②主イエスの死の二重の意味で語られています。その上で「しばらくすると、わたしを見るようになる」とは、①主イエスの復活と②主イエスの再臨と神の国の完成の二重の意味が込められていました。その上で、主イエスは二〇〇〇年経った今なお訪れていません。しかし、主は神の民が満ちる時を忍耐強く待っておられ、すべての神の民が満たされた時に、すぐに来られることも約束してくださっています。

「喜ぶ」という言葉においても二重の意味を考へることにより主の意図を理解できます。つまり、ここで語る喜びは、単に今の感情を表す言葉に留まらず、神から与えられる永遠の喜びがあることを理解して頂きたいと思えます。

II 永遠に与えられる神による喜び

私たちは、苦難・苦痛・艱難・試練・病などを前にした時、「喜び」が消え失せます。しかし復活の主イエスと出会うことよって与えられる喜びは、艱難の中にあっても消え失せることはありません。つまりこの喜びとは、復活の主イエスと出会う喜びであり、主イエスは天に昇りましたが、私たちは聖霊をとおして、神と共にある喜びに満たされています。これこそ「神我等と共におられる(インマヌエル)」の喜びです。

短絡的に考へる人たちは、神を信じて、喜びに入れられるのであれば、目の前にある艱難は何なのかと思われまます。確かに、神を信じれば、すべての生活がハッピーになるかとさえ言えはそうではありません。私たちは、今の時、目先ばかり見ているダメです。主なる神は、天地万物を創造し、すべてのもの・時間を支配しておられます。その方が私たちと共におられ、その方を私たちが信じることにより、私たちは永遠の生命の喜びに満たされています。三つの御言葉を確認して頂きたいと思えます(①耐えられないような試練はありません。Iコリント一〇章一三節、②試練により本物とされています。Iペトロ一章六b七節。③主は私たちに必要なものを備えてくださいます。マタイ六章二五三二節)。その上で主イエスは「願いなさい。そうすれば与えられる」とお語りくださいます。私

たちは祈ることにより、主は聞き届けてくださいます。疑い、半信半疑となることにより、私たちは絶対者である主の御力を軽んじる罪を犯します(マタイ七章七―一節)。

III 永遠の神の喜びに生き続けるには

ではこの永遠の喜びは、どのようにすれば手に入れることができるのでしょうか？

私たちは、キリストの十字架により私たちのすべての罪は赦され、義と認められました。これは永遠の事柄であり、私たちは信じることにより、主によって与えられた恵みです。この時同時に、主は私たちが神の子として、神のすべての祝福に導いてくださいます。

だからこそ、私たちは毎日の生活で艱難のなかにあっても、救い主を顧みなければなりません。主が私たちに与えくださった罪の赦しと救い・神の子とする祝福は、永遠の次元においてです。主イエス・キリストが十字架の死から三日目の朝に復活してくださったように、私たちキリスト者も、キリストが再び来られた時、復活の体が与えられ、そして神の御国、天国における永遠の生命と祝福と喜びが約束されています。

だからこそ、主イエスは「悲しみは喜びに変わる」とお語りくださいます。主のこの約束が、私たちに与えられています。そうであれば、私たちは何をすれば良いのでしょうか？ 主の約束を素直に受け入れ、救われていることを神に感謝すれば良いのです。そして神を信じていること。主イエス・キリストの十字架により、罪が赦され、救いと永遠の生命が与えられたこと、そして今も聖霊の導きにより、主の救いに入れています。その上で、主を疑う不信仰、御言葉に聞く時間・祈る時間が少ないこと、自らの人間的な判断によって生きていることを受け入れ、悔い改め、主への信仰を新たにしつつ、主を信じて歩み続けることが求められています。

I 十字架によって明らかにされる奥義

主イエスの十字架が目の前に迫っています。神の救いの御業が成し遂げられようとして、主イエスの十字架と復活は、キリスト教信仰の中心であり、私たちの救いの確信そのものです。しかし同時に十字架は、天地万物の創造から神の国の完成の救済史全体の中にあっても、大きな転換期です。つまり聖書は旧約聖書と新約聖書から成り立っています。旧約と新約を分けるのが、キリストの十字架です。

旧約から新約の時代に移ることに、神礼拝をはじめ、あらゆることが変化していきます。旧約の時代、メシアの到来が約束されつつも、キリストの到来と十字架ははっきりとは示されず、隠されていました。キリストの十字架の御業が完成することにより、神の救済の業が、私たちに明らかになります（参照・ローマ一六章二五〜二六節）。

主イエスが二五節において語ることは、まさにキリストの十字架により、父なる神の救いのご計画が、明らかにすることを語っています。今までの聖書では「奥義」と訳されていた事柄（新共同訳聖書は「秘められた計画」・「秘密」と訳す）が、キリストの十字架によって明らかになります。

II 三位一体論的に神を信じる信仰

そのためキリストの十字架を境に、神礼拝も変化を遂げます。旧約時代の神礼拝とはどうでしたでしょうか？ 出エジプトにおいて幕屋が与えられ、後に神殿へと移っていきませんが、契約の箱の置かれている至聖所を前に、祭司が贖いの生け贄を繰り返していました。大祭司ですら、この契約の箱の置かれている至聖所に入ることが許されたのは、年に一度しかありませんでした。通常は祭司が聖所において奉仕をしていました。ましてやイスラエルの民が、直接、神の御前に立つことはできませんでした。イスラエルの民が神の御前に立つことなど許されませんでした（出エジプト三章五〜六節）。

一方現在、旧約の民のように、主なる神の偉なる御業に、ひれ伏し、畏れ敬う姿勢が忘れられています。現代に生きる私たちには、主の御前に遜り、主の御言葉に全面的に聞き従うことが求められています。

そして新約の時代となり礼拝様式が変化します。旧約の時代は祭司によって執り成しが行われていましたが、それが必要なくなりました（二六節）。主イエスが十字架において死を遂げられた時、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けたからです（マタイ二七章五一節）。それはキリストの十字架の死により、神の民の罪の贖いが完成したことを示しています。キリストの十字架により、神の民の罪は赦され、義と認められ、神の子に入れます。神と民との間にあった、義と罪という隔たりはなくなり、神は私たちと和解してくださいました。この時、父なる神の御業はすべて明らかに、罪人の贖いが完成することにより、神と神の民との間で交わりを行うことに支障がなくなりました。ここに主なる神の救いの御業が完成し、ここに神の愛がはつきりと示されました。

二七節では二つの文章が並列的に記されていますが、「なぜなら」という接続詞が訳されています。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（使徒一六章三一節）と語られています。私たちが愛し、私たちが死から救うために、キリストが十字架にお架かりくださり、死と復活を成し遂げてくださいました。このはつきりと示された救いを、あなたが受け入れるかどうか、問われています。

この後私たちは聖餐式に与ります。聖餐式で式辞が読まれ、信仰と罪の悔い改めが求められます。主の晩餐に与ることは、キリストの十字架により死から救われたことを感謝をもって受け入れる信仰告白です。そして主は、私たちがキリストの十字架により罪が赦され、神の民として永遠の生命にあることを宣言してくださいます。

最後に主イエスは「あなたがたはわたしの名によって願うことになる」と語られます。主の救いの御業は、御父のご計画が、御子によって成し遂げられ、御言葉により、聖霊と共に私たちに示されています。一方、私たちは「主イエス・キリストの御名において祈

り」ます。聖霊をとおして、御子によって、御父に対して祈ります。旧約における至聖所の垂れ幕は廃棄されましたが、御子の仲保（仲介）が必要です。父なる神の私たちへの愛は、御子の御業により明らかにされ、聖霊により私たちの心に示されています。三位一体なる主なる神のハーモニーの中に、私たちの救いがあり、命があります。

「平和をくださる主」

ヨハネによる福音書一六章二五〜三三節

二〇一一年一月一三日

序

主イエスは最後の晩餐における説教の最後の言葉が三三節に記されています。主イエスが十字架にお架かりくださることにより、弟子たち・私たちに与えられるものこそが、平和です。しかし主イエスは、さらに「あなたがたには世で苦難がある」とお語りになります。私たちは、苦難の中にあつて主によって与えられる平和とは何かを、考えてかなければなりません。

I キリストの十字架によって与えられる平和

弟子たちの信仰告白（三〇節）は、マタイ福音書一六章においてペトロの行った信仰告白と並び、弟子たちが自分の言葉において信仰を告白した素晴らしい言葉です。その時点で行える信仰告白を行っていくことは素晴らしいことです。しかしこの後すぐ、彼らはつまりきます。キリストが逮捕されるや否や、散ってしまいます。主イエスの三二節の言葉はそのことを指摘しています。家に帰るとは、守られていることであり、弟子たちはユダヤ人から逃げ、閉じこもりました。しかしこれは同時に主イエスと共に霊的戦いを行うことなく、世に留まり続けていることを語っています。まさにキリストを十字架にひとり取り残したのであり、弟子たちはキリストの十字架を幫助（ほうじょ）していることになり

ます。

あなたは家に閉じこもっていないか？ 私たちは救いを求めて礼拝に与っています。しかし同時に私たちの属する世にはサタンの働きに満ちています。サタンの働きに対して、危険を察知して、霊的に適切な判断を行うためには、主の真理を御言葉から聞き、御言葉から解決を見いださなければなりません。御言葉により、何が罪であり、何が神の恵みであるか判断することができます。悪霊は、罪を隠し、善人のように私たちに近づき、私たちに罪を犯させ、救いに導く神から切り離します。私たちは罪に敏感に反応することができるように、主を礼拝し、主の御言葉と祈りにより、主の真理、主の御意志を確認し続けなければなりません。

キリストは、ひとり十字架の道を歩まれます。キリストが担ってくださいた孤独と十字架は、弟子たちや私たちにとって重たくて担うことなどできません。そしてキリストが担ってくださいた十字架は、キリストを救い主として信じる私たちが背負った十字架として転嫁され、キリストを信じるあなたの罪が償われ、義と認められ、神の子であることを宣言してくださいます。これが神の恵み、神の愛であり、神の平和そのものです。

そして主イエスは、十字架の死と復活を遂げ、弟子たちと再会した時に、改めて弟子たちに平和の宣言をしてくださいます（二〇章一九〜二二節、二六節）。

II 世の苦難の中に輝く平和

しかし、十字架と復活により平和をお与えくださるキリストは、「あなたがたには世に苦難がある」とお語りになります。「苦難」それは家の中に閉じこもることなく外に出ることです。外に出ることにより、サタンとの戦いがあり、苦難が待ち構えています。

キリストは十字架と復活によりサタンと罪・死に対して勝利を遂げてくださいました。しかし、今なおサタンはこの世に存在します。サタンが完全に滅びるためには、キリストが再臨される時を待たなければなりません。主イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとへ行くことができない」（一四章六

節)とお語りくださいました。天国につながる主の道は、決して平坦ではありません。様々な迫害・苦難があります。しかし「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです」(Ⅱテモテ三章一二―一七節)。また同時に、キリストは「勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(三三節)と宣言してくださいます。キリストの復活は、勝利の宣言です。パウロも語ります。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで、神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」(Ⅰコリント一〇章一三節)。

キリストの十字架と復活を信じ、受け入れる者には、罪の赦しと共に、神の平和としての義認、神の子、聖化が与えられ、永遠の生命の喜びに包まれます。世の支配者を恐れ、家の中に閉じこもるのではなく、苦難や艱難があろうとも、主によって与えられる平和を求め、御言葉に聞き、主の真理の道を歩み続け、神の御国における永遠の生命の喜びの内に有り続けたいものです。